ハイスクールECO×D

名前のないザックス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんだかよく分からない間に神様転生することになった主人公!!エコの戦士の力を自分なりに魔改造し、ハイスクールＤ×Ｄの世界で生活をｅｎｊｏｙしつつ大暴れ!!(する予定)作者の１周年記念として書き始めたこの小説、向かう先はどこなのか!?原作はどんな感じで崩壊するのか!しないのか!行き当たりばったりで進むハイスクールＥＣＯ×Ｄ!みなさんどうぞよろしくお願いします!!

ーーーーー大昔、二体のドラゴンと悪魔、堕天使、天使の三つの種族が戦った。その

ドラゴンは【二天龍】と呼ばれるもので、とてつもない力を持ち、戦場はまさしく混沌としていた。
誰もが勝てぬと思った。三種族のトップたちも、その圧倒的戦力の差に心折られようとしていた。
まさにその時、突如として戦場に一人の戦士が降り立った。緑の鎧に身を包み、暴虐無人に暴れまわる二天龍を倒さんとするものが、そのもの名をエコガインダー。後に三種族を救った英雄として語られる者の名であるーーーーー

悪魔出典　環境超人エコガインダー第一話　冒頭ナレーションより

目次

第1話　転生（テンプレ）――1
第2話　激突!!二天龍との闘い!!――10
第3話　みたか！これがエコガインダーだ！――20
第4話　Sとの出会い／Dの改心――28
第5話　Re：ゼロから始める同居生活――43
第6話　ひまわり畑で激闘を――50
第7話　修行開始！早すぎるパワーアップ!?――69
第8話マキちゃんと雄輔の休日――78
1第9話　日常と明日への不安――88
第10話　激戦――95
第11話　予感と予感と面倒ごとの気配――105
第12話　出会った主人公。――114
第13話　戦闘と危機と自業自得？――126
第14話　未来の不安――138
第十五話　始まる物語――148

第1話　転生（テンプレ）

「ここ…どこ…？」

今私は周りが白に囲まれた空間に居ます。どうやってここに来たのか？何が理由でこんなことになったのか？全く覚えてません。唯一覚えてるのは自分の事と家族やら友人の事、それくらいかな？

取り敢えずずっと立っとくのもあれなのでそこら辺をふらふら歩いてみよう。

ーーー数分後ーーー

そろそろ心折れそうです。いや、周りが白一色だから進んでる実感もないしどこにいるかも検討つかない。こんなところに放置され続けたら発狂待ったナシです。

「那珂ちゃんだよぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!」

意味もなくこんなこと叫ぶくらいには精神に来てます……いや待てよ、ここ来る前も結構こんなことしてたような……案外余裕あるのか私。そんなことしながらまたも棒立ちとしてると

「ハァァァァピィイバァァスゥデェェェイ!!新たな君の誕生だぁぁ!」
「ウワァァァァァァァァァァァァ」
ダディみたいな叫び声を上げながらその場から走って逃げようとして慌てるあまり脚がもつれそのまま顔面から地面にダイブした、めっちゃ痛い。
「ンンッ!驚かせてすまなかった、少しテンションが上がりすぎてしまっていた」
「ふぁい、ふぇつにふぁいひょうふれふよ」
さっき顔面ダイブしてしまったばかりなので上手いこと舌が回らず変な風に返事をしてしまった。
「本当に大丈夫かね?まぁ君がそういうならそうなのだろう、さて!おめでとう!君は神様転生に選ばれた!」
「なん……だと……」
いきなり目の前の欲望おじさん似の人がそんなことを言い出した、普通なら頭のネジ吹き飛んでのか?と思うのだろうがそんなことは気にしない。本当に神様転生出来るなら是非ともしたい、というか土下座してでも頼む誰だってそうする、俺もそうする。
「君は適応能力あり過ぎだろう、普通はさっき君が思ったみたいに頭のネジ吹き飛んでるのか?と思うだろうに」
「小さいことを気にすると禿げるって偉い人が言ってましたから、それと本当に転生で

きるんですか？嘘だったら泣きますよ」
「また髪の話してる……転生は本当だよ、これでも一応偉い神様だからね」
「なんと！まさか本当にこんな経験が出来るなんて……自分の運の良さに今まさに感謝をします、ありがとう本当にありがとう……それしか言葉が見つからない……」
「ウォッホン！それなら君には最早お決まりのあれを授けよう……君はどんな《特典》を望むかね」
　ゴゴゴゴゴゴという効果音が一瞬見えた気がするがきっと気のせいだろう、それよりも特典か……やはりお決まりなのは仮面ライダーとかスタンドとか他なんか色々だろう、しかし自慢じゃないが友達には変わり者と言われる私はそれよりもなりたいものがある、地球の未来を救うため、エコを子供たちに伝え未来を救った伝説のヒーロー……そう、僕のなりたいのは……
「僕の望む特典は……」
「君の望む特典は……」
「僕は……エコガインダーになりたい!!」
「……？」
　覚悟を決めて僕がそう言うと神様（仮）は僕の顔を二三度のぞき込み目を何度も瞬きさせ僕に一言こう言ってきた。

「すまないが……エコガインダーて何かね？」

どうやら神様もエコガインダーを知らないらしい……あれ？涙が出てきた……

その場で笑顔のまま泣いていると神様が焦ってた、何をそんなに焦ってるんですか？別に気にしてませんよ、えぇ、友達にも私が勧める前に知ってたのは1人だけでしたし、ただ神様なら知ってるかなーと期待してたら見事にその期待は粉々になってしまっただけですから。えぇ気にしてなんかいませんとも。

「いや、その、本当にすまない今からそのエコガインダー？を見てくるから待っていてくれ、そこに部屋を作っておいたからそこで本を読むなりテレビ見るなりゲームするなり好きにしてていいから、冷蔵庫の中身もどれでも食べていいから！だから少しだけ待っていてくれ、それじゃ!!」

そう言い残すと神様はその場から消えてしまった、取り敢えずいつの間にか作られたその部屋に入ってみると、大きいテレビ、本がみっちり詰めてある本棚、冷蔵庫とキッチンがあり、結構広い部屋である。とりま部屋の間取りはリビング、キッチンの二部屋だけだがそれでも結構広いので先ほどのお言葉に甘えて好き勝手しておこう、まずはゲームだな。

ーーー数時間後ーーー

あちゃー、また負けちった。ただ今虹6で遊んでいるのだがこのゲーム機びっくりしたことに前自分が使っていたやつである。起動した時に自分のアカウントが入ってびっくりした、因みに私は攻撃ではハンマー使う人か、グレラン？で壁なんかを壊す女の人、それとスナイパーの人をよく使ってます。防衛はジャミング使う人か防具を全員に配る人のどちらかですね、それでさっきから負けまくってて気分が若干落ち込んでるん。まぁ相手が強いということだね、仕方ないや。

取り敢えず虹6はやめて本でも読もうと思って後ろを見ると丁度玄関が開いて神様が入ってきた、律儀やなさっき使った瞬間移動を使えばいいのに。

「いや、お待たせしてすまない！取り敢えず全部見てきたので戻ってきたんだが、少し質問があるんだ」

「何でござりまするか」

「あのままで行くのかね？失礼だと思うが流石にあれだとこの先生き残れそうにないように思えるが」

そう神様は言ってきた、ということは少なくとも原作そのままのエコガインダーだと手も足も出ないような奴がそれなりにいる世界に行くわけですね。それならそれでこちらも考えがあるのです

「いや、流石にあのままだとやばそうなので少し力とか足したいのですが」

「勿論だとも!!さぁ!どんと来なさい!」
そう言って胸を叩く神様、それなら色々と足しまくっちゃいましょう、そして僕が考えた最強のエコガインダーにするのだ!!……まぁ少し自重しよう。
ーーー神様と青年相談中ーーー

神様と色々話し合ってある程度は決めることが出来た、これで結構強くなった気がする。まぁ少し神様に投げてしまったのだが多分大丈夫でしょう。
「取り敢えずこんな感じでどうですか?」
「フムフム、OKだ!他に何か無いかね?」
「そうですねぇ…やはりテンプレの戦ったり体を鍛えたり戦ったりすることで強くなるボディをください」
「おk、他には?」
「うーむ……波紋とか使ってみたいですね~あれはもうロマンです、ロマンティックが止まらないくなるぐらいのロマンです」
「どんなロマンだ、まぁそれも別に問題ないから大丈夫だね。それくらいでいいかな?」
「あっ、強くなるのに上限とかは無しでお願いします。」
「分かった、他にはもう無いかい?」

　そう神様が言ってきたので考えてみたら1つ思い浮かんできた、自慢じゃないが前はそんなに友達が居らずつまらない人生だった。まぁ自分の引っ込み思案がいけないんだろうけどね。
「もう一つ、人に好かれるようにして下さい」
「それは……恋愛感情的なものかね」
　急に神様がキリッとした顔になってこちらを見てきた、そりゃ私だって男ですからモテたいですけど今回願ってるのはそうじゃない。
「違いますよ、なんかこう……いるでしょうクラスの皆に好かれてる人気者みたいな気さくで明るい人、あんな感じですよ」
「要するに恋愛的な意味じゃなくて友情的な意味かね」
「そうです、そうですそういうことです！」
　良かったちゃんと伝わったようで、そこから恋愛感情に持っていくのは私の努力次第だからね。
「あいわかった、それで他にはないかな？」
「特にもう無いですね、準備ＯＫです」
「よし、それならこれから君をある世界に送る。君を送る世界……それは……」
「それは……」

「ハイスクールD×Dの世界だ!!」
「な、ナンダッテー!!」
　あのパワーインフレ、おっぱい何て言われてるらしいあのハイスクールD×Dの世界か！正直小説サイトで読んだことはあるけどそれしか知らん!!
「流石に原作知識があり過ぎてもつまらんだろうし、そっちの方がいいでしょう？」
「もちろんです、プロですから」
「という訳でいってらっしゃーい」
　最後は若干投げやりでしかもこっちのネタにツッコミもせずにボタンを押して消えてしまった、しかし何も起こらず不発か？と思っていると不意に後ろから
「デストローイ!!ダイテンガン・ネクロム、オメガウルオウド」
　そんな音声が聞こえてきて後ろを振り返るといつの間にか部屋は消えていて振り向いた先にはネクロムが必殺技を放とうとしていた。
「ハァァァァァァ!!!!!!!!!!」
「タコス!!!!」
　掛け声とともにこちらに飛び蹴りを叩き込もうとするネクロムにそのまま蹴られて数メートル吹き飛び地面を転がっていった、そして体にビリビリと電気みたいなのが迸り取り敢えず最後に敵キャラぽくなんか叫ばなきゃと使命感にかられ……

「チキショオオオオオオオオ!!!!!」

そう叫んだあとに体が爆発し、そのまま意識を失った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

第2話　激突!!二天龍との闘い!!

（うーん……デストローイはやめてくれー……）
『おーい、起きたまえ』
「はっ！ここは何処？私は誰？」
　そんなありきたりなセリフとともに寝転んでた場所から飛び起きた俺、いや本当にここどこ？周りは森だし空は赤？紫？とにかくおどろおどろしい感じの空である。少なくとも俺の知ってる空じゃない。
「神様、ここどこですか？」
『そこは原作が始まる結構前の時代……に間違って送ってしまった。』
　本当に申し訳ない。と某キチガイ博士のような謝罪をしつつ原作の時代に送る準備をするとのことなのでそれまで自由に行動してていいとの事、それなら取り敢えずここら辺を散歩しようと思ったのだが、その前に神様に1つ質問をした。
「試しにエコガインダーになりたいんですが、何か必要な事とかありますか？」
　そう、エコガインダーにこれといった変身ポーズもアイテムもない。何時も他人の家に無断侵にゅ……音も無く現れ、敵を撃退して、エコについて教えてから消えていく

そんなヒーローなのだ。
『いや、そういうのは無いよ。これといったポーズも変身アイテムもいらない。新マンみたいに念じるだけで変身できる』
「つまり右手を上げてれば変身するんですねわかります。」
『まぁ、変身ポーズとかは君が勝手に決めていいよ』
「分かりました、取り敢えずそこら辺散歩してきますね」
　そう言うと行ってらっしゃいと一言残して神様から返事は帰ってこなかった、きっと原作の時代に送るために準備をしているのだろう。それならそれまでの間、周りを散歩してこようと意気揚々と歩きだそうとすると。何処からともなく巨大な唸り声というか、激しい雄叫びみたいなのが聞こえてきた。耳を澄ませれば遠くの方から何やら人の大声とか何かが爆発したりする音が聞こえてくる……気になるのでそちらの方向に走っていった。以外にも距離は近く、割と早く着くことができた。
　そして俺は目の前の光景に唖然とした、其処には巨大な赤と白のドラゴン？と背中にカラスやら天使やら悪魔やらな翼を生やした人達が戦っている光景だった。そしてそれ以上に俺を唖然とさせたのはこの場の風景だった。元々森が有っただろうここには薙ぎ倒され燃え尽きた木や燃えている木、動物の死体何かも転がっているそれに大地は干からびておりここでは作物どころか草１本生えないだろうといった印象を与えてく

る。この光景を見た瞬間、俺の怒りメーターがフルスロットルしてダイテンガンした。もっと分かりやすくすると、髪型を貶された仗助状態なのである。俺はエコガインダーからエコの大切さや自然の尊さを教えてもらった。それから植物や動物の世界にハマってしまい、家で育ててるバラの花に話し掛けたりする事もあった。俺にとって自然や動物はいつしかとても大切な存在になっていた。だから今こうして自然が破壊されているのを見ると俺の中の何かがプッツンしてしまうのだ。それにこれがエコガインダーを選んだ理由でもある。エコガインダーは俺に大切な事を教えてくれた、だから転生の時にエコガインダーを選んだのだ……まぁ、結構魔改造しまくったけど。（主に能力や性能的な意味で）

少し話が脱線したが、要するにこの光景は私の怒りを大噴火させるには充分過ぎたわけだ、えっ？今の説明じゃわからねぇよ？何でや！まぁとにかく動物とか自然を無闇やたらに破壊する奴は許せんという事を理解てくれたらＯＫだ。

そんな脳内説明をやっていると赤ドラゴンの前に怪我をした女性というか、魔法少女？が倒れており今にも赤ドラゴンが口からなんか出そうとしていた。その瞬間俺は無意識に変身しており考えるよりも先に魔法少女の元へと全速力で走っていった。そして全速力で走りながらその少女をお姫様抱っこの形で抱えそのまま走り続けて赤ドラゴンから結構離れたところで急停止した。

急停止した後その場で後ろを振り向くと先程少女がいた場所を巨大な炎が襲っていた。あと少し遅かったら今頃この少女はこんがり焼かれていた事だろう。

「大丈夫ですか？怪我……は、かなりしてるけど歩ける？」

その少女を見た時すぐに気づくほど、というか気づかない方がおかしいくらい傷を受けていた。

「えっ…あっはい、だ、大丈夫…です」

その少女は困惑した様子でこちらの質問に答えてくれた、まぁいきなり変な人（しかも特撮ヒーローの様な姿をしている）に助けられたら誰だって困惑するだろう。そんな事を考えていると何処からか鳥が羽ばたく様な音が聞こえてきた。その後悪魔のような翼を生やしたイケメンがこちらに来た。

「セラフォルー！無事か！」

そのイケメンはこちらにセラフォルーという名前を呼びながら来た、どうやらこの少女の名前はセラフォルーというらしい。てかこの人原作キャラだったのね。全然気付かなかった、まぁ二次小説でしか読んだこと無かったから仕方ない。てかイケメンこっちみんな。睨み付けないでくれ、確かに怪しい人がいきなり知り合いを助けたりしたら警戒するけど一応命の恩人なんだから。もっと警戒解いてくれないかな、とりあえずセラフォルーさんをこのイケメンさんに預けておこう。

「この人のことを頼みますよ」

そういってちょっと強引にセラフォルーさんを預けたその直後にドラゴンが大声をあげながらこちらに怒鳴りかけてきた。

「貴様！我らの神聖な戦いの場に入ってくるとは何奴だ！」

こちらを睨みながら俺の名前を問いかけてきたドラゴン。そのとき俺は考えたりするよりも先に、つい体と口が勝手に動いてしまいその場で両足を肩幅まで広げ、両腕を前に突き出し大声をあげてとある戦隊の掛け声を真似してこう叫んだ。

「聞いて驚け!!!」

そう言うのと同時に自分の脳内にある特撮やアニメで見たかっこいいセリフやポーズを考え思いついた先から言葉にしていく。

「大地と自然の声を聴き、この地に降り立った地球のヒーロー！」

そう叫びながらダイレンジャーのシシレンジャーがやっていたポーズをそのままやる。

まず両足を肩幅まで広げ上半身を腕ごと右の方向に捻り、両腕を人差し指だけ広げ後の指は半分閉じた状態で前へ突き出す。

そのまま上半身を今度は左にひねりながら突き出していた両腕を左に捻るのと同時に胸に引き寄せる。

この後はまた体を右にひねり、両腕を胸の位置から腰の位置に真正面から見て左半月を描くように腕を降り下ろす。

最後に左腕を上にあげ右腕を下に下げて反時計回りに回しながら腰を低く下ろし、先ほど回していた両腕を右半身のほうに持ってきて、体からこぶし３つ分くらい離した位置で左手を開き右手を握った状態で同じ高さで固定する。

先ほどの一連の流れをした後に今度は腰を低くした体制から立ち上がり体を右にひねってからそのまま固定していた両腕も右にひねり体が前を向くのと同時に右手を突き出し左手を左腰に添えて

「環境超人!!!!」

そう叫んだあと前に突き出していた右手を右腰に添えて左手を顎より少し下に持っていき親指で自分の方を指す。

そのあとに右手を前に突き出し、左手を横に広げる。その動作をしながら

「エコガインダー!!!!」

そう高らかに名乗りを上げる、名乗りを上げたすぐ後に後ろの方で巨大な爆発音とともに爆炎が上がる。

この時もし真正面から今の名乗りを見れば完璧に特撮ヒーローの名乗りと同じようなシーンになっていたことだろう。

「貴様の名前などどうでもよい！今この場で貴様は消し炭になるのだからな！」
　そっちから何奴だ！て聞いてきたのにそれはないだろう。しかしその場のノリで名乗りを挙げたのはいいけど果たして俺はこのドラゴン二体に勝てるだろうか。そんなことを考えてると神様からテレパシーが送られてきた
《聞こえてるかね？こちらの準備は終わったよ》
〔神様！グッドタイミングです！助けてください！」
　神様にこれまでのことの顛末を話して何とか目の間のドラゴンに勝てないかと聞いてみたところ
《それなら少しこちらからも手助けしてあげよう》
〔さすが神様！俺にはできないことを平然とやってのける！そこに痺れるあこがれるぅうう！〕
《茶化さないでちゃんと話をきておくんだよ？》
〔Ｓａｒ!!ｙｅｓｓａｒ!!」
　ー神様と話し合い中ー
《それじゃあ後は君の努力次第だよ、頑張ってくれ》
〔はい！頑張ります！」
《それじゃ時間の流れを元に戻すから、グッドラック！》

そういうと先程まで遅くなっていた時間の流れが元に戻った、流石にこんな戦場の中で棒立ちで話をするなんて自殺行為でしかないので神様が時間の流れを遅くしてくれていたのだ。

『ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!』

解除した途端にそんな音声が聞こえてきた、赤いドラゴンはこちらに向かって炎を飛ばそうとしていた。このまま棒立ちで受けてやる訳もなくその場で強く地面を踏み抜き高くジャンプした。その際地面が抉れて凹んでしまった。そこまで力を込めたつもりがなかったのでかなりびっくりした。

俺が飛んだその直後そこは炎に包まれていた。しかも先程セラフォルーさんの時とは違い、地面がドロドロに溶けてしまっている。

「はっ!そんな蝿が止まりそうなスピードの攻撃じゃ俺には当たらねぇぜ!!!!」

実際は内心かなりビビってるのだがそれを表に出さないよう、敢えて強気な態度を相手に示す。そして空中に浮いた状態で俺は右手を上げて人差し指を天に向ける、すると空の様子がおかしくなり（元から変な色をしていておかしいが）電が雲を走る。そして雷が俺に向かって落ちてくる、そして俺は落ちてきた雷を全身で受け止める。実際はこんな事起きたらまず生きてられないが、俺は体が壊されるどころか寧ろ力が湧き上がっ

てくる。この事についてはまた今度話すので今は勘弁して欲しい。そして雷が俺の体に帯電している状態で上げていた右腕を赤いドラゴンに向け、必殺技を放つ。かつて偉大なる勇者が使っていたその技の名前を叫びながら。

「闇を切り裂け!!サンダーブレーク!!!」

人差し指から稲妻が赤いドラゴンへ向かっていく。その稲妻は赤いドラゴンの頭に直撃し、全身に電撃が走っていった。

「ＧＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!!!!」

巨大な咆哮を上げて赤いドラゴンは大地に倒れた。

ふう、相手が舐めぷしていたこともあって割とすぐに倒せたな。ていうかあのドラゴン、確か原作にもｂｏｏｓｔ！

とかいって自分の力を倍加する奴がいたな……確か：ドライブ？いや、これは仮面ライダーのほうだ。まあ、思い出せなくてもまた会う時があるからいいや。（楽観的）

あとは先程からかなり空気になっている白いドラゴンだけだな。

「さて、そこの白いドラゴン……ひとっ走り付き合えよ！」

某仮面ドライバーの決め台詞を放ってから白いドラゴンに向かって行った。さあ、第二ラウンドの始まりだ‼‼

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

第3話　みたか！これがエコガインダーだ！

「貴様如きにこの私が、倒せる訳がないだろうが!!」

そう言いながら翼を羽ばたかせる白いドラゴン、名前は確か……アルマゲドン？いやこれは映画だ。まぁ名前なんてどうでもいいか、重要なのはここで奴を確実に倒さなければならないということだけだ。そんな事を考えていると奴は空へと飛んでいった、こちらも飛びながら追うが正直こちらが不利だ。こっちはまだ飛ぶのに慣れてない、だから奴を今後飛ばせる訳には行かない。ならどうするか？簡単だ、飛べなくすればいいのさ。まずは奴を挑発して地面に降ろさなければならない。

「ふん！飛んで逃げるだけなら、カラスや蝙蝠でもできるぞ！どうした？あんなに自信満々だったのに結局は逃げ腰じゃないか！」

取り敢えずそれっぽい言葉を並べて挑発する、正直相手を挑発するとかやったことないからアニメやらで見たのを真似て言ってるだけだから、挑発に乗らないかもね。

「貴様……！人間如きがこの私を侮辱するとは！いいだろう、そこまで言うなら貴様なぞ飛ばずとも倒せる事を今すぐ証明してやろう!!」

前言撤回このドラゴンチョロイは、挑発体制ＺＥＲＯですわこれは。いやこんなに簡

単に乗るとは予想外だわ。まぁ結果的にこっちの思惑通りだからいいよね。そして俺とドラゴンは地上に降りた、周りは相変わらず自然が破壊されており、見るだけで怒りが湧いてくる。

「貴様の命もここまでよ!!喰らえぃ!!」

そんな事を考えてるとこちらに翼を羽ばたかせ竜巻を起こし俺をその渦に巻き込ませようとする、しかしそれは逆効果だ。この竜巻は寧ろ俺に力を与えてくれる。

「無駄無駄無駄ァ!!この竜巻は俺に貴様を倒すための力を与えてくれているぞ!!」

そう言いながら俺は竜巻をマジンカイザーＳＫＬのルストストリームの様にしてドラゴンに向けて放つ。

「粉みじんになれ!!ルストストリーム!!」

そして竜巻はドラゴンを包み込み体や翼を切り刻んでゆく、しかし『Ｄｉｖｅｄ』という音声がけたたましく鳴り響き、それと同時に竜巻が徐々に小さくなっていき最後には消えてしまった。

「ふん!この程度でこの二天龍の私を倒せると思っているのか!!」

奴はこちらに余裕の表情を向ける、確かに力が吸収、半減されるのは厄介だ。しかし、こちらにも考えはある。今俺の持つ武器を使って奴をぶった斬る、もしくは奴に必殺技の内の一つを当てて倒す。この二つに一つである、必殺技の方は大きさ的に無理そうな

のでぶった斬る方にしよう。大丈夫、死にはしないから。その代わり痛いかも知れないけど。

「だったらこいつを受けてみろ!!!!エコロジーパワァァァァァァッッ!!!!チャーージッッ!!!!」

そう叫ぶと周りの木や大地から緑色の光が俺の方に集まり、胸にある環境良識回路へとエネルギーが溜まっていく。これは改造した要素の一つで、本来はエコへの心とエコの力を貯めるだけなのだが、俺の環境良識回路は自然のエネルギーを吸収してパワーを貯める。これは自然や地球からエネルギーを分けてもらっているのだ。その力は環境良識回路の中に溜まり、何倍にも増幅する事ができる。

そして俺は胸の環境良識回路の前に手を持っていき、そこから必殺の剣を取り出す。

「行くぜ!!エコロジィィィィィィ!!!!ブレーーーード!!!!」

緑の光が胸の環境良識回路から溢れて剣の柄が出てきくる。それを両手でしっかりと掴みそのまま力任せに引っ張り剣を取り出す。その見た目は西洋の剣のようで、鍔の左右が刃の方に折れており、鍔の中心には緑色の玉が設置されている。その玉にはEの文字が書いてあった。

その剣を両手でしっかりと持ち切先をドラゴンの方に向け、その場を思いきり踏み抜きドラゴンの方に飛んでいく。その勢いのまま後ろに回り込み、また地面を踏み込み今

度は翼より少し上まで飛んだ。そして両手で持つエコロジーブレードを真上に振り上げ、エコロジーパワーを流し込んだ。そうすると瞬く間に刀身が緑色に輝く。その剣を振り下ろし左の翼を切り落とした。
「ゴァァァァァァァァ!!!!!!」
　大気が震えるほどの雄叫びを上げるドラゴン、その声は痛みに震えていた。
　雄叫びを上げた後、ドラゴンは赤いドラゴン同様地面に沈んだ。エコロジーブレードを胸に戻しながら落下して、地面に着地した。着地を決める時、両足を広げて右手を地面に着き左腕を横に広げて心の中で、(スパイダーマッ!!!!)と叫んでみたりした。うん、間が指したんだすまない。

　はぁ～、何とかなるもんだね～。２匹とも気絶してる様だしこのままトンズラしてもいいでしょ?ダメですか?あっ、ダメですかすいません。まぁ神様に送ってもらわないと何もできないからね。取り敢えず神様に連絡をしよう。
(神様～、こっち終わりましたので何時でも送ってもらっていいですよ)
『ＯＫ!!こちらも少し暇がいるから待っていてくれ、２、３分で済むから』
(ハイ了解です)

さて、準備もすぐ終わりそうだしそこら辺に腰掛けて待ってましょう。そう思い腰を掛けようとすると。先程助けたセラフォルー？さんがこちらに駆け寄ってきた。
「さっきはどうもありがとう、エコガインダーさん」
そう言ってウィンクをしてくるセラフォルーさん、カワイイのぅ、癒しだのぅ。こっちも何か話さなきゃね、会話はキャッチボールしないといけないからね。会話のドッヂボールはダメだよ。
「いや、別に気にしなくていいですよ。困った時はお互い様です」
あっ、因みに今もまだエコガインダーの状態だからセラフォルーさんには素顔は見せてないよ。これで身バレを防ぐ事ができたぜ！尚特に意味は無い模様。
「そんな事ないよ！エコガインダーさんは私たちの命の恩人だよ！だから出来たらお礼をしたいんだけど、ダメ？」
そして上目遣いで首を傾げながら問いかけてくる、おのれセラフォルーさん、可愛さで私を暗殺する気だな？許せる！しかし残念ながら時間が来たようで、体が徐々に光に包まれて来た。そうするとセラフォルーさんが慌てた様子で問いかけてくる。
「エ、エコガインダーさん!!大丈夫なの!?体が何か光って消えていってるよ！」
「大丈夫ですよ、ただ時間が来たようなので残念ですがお礼は次の機会に受け取ります」

そう話してる内にもどんどん体が消えていき、下半身がもう殆ど消えてしまった。するとセラフォルーさんの後ろから先程彼女を預けたイケメンさんが現れた。

「君は……一体何者なんだ?.あの二天龍を軽々と倒すとは、君は一体何なんだ」

イケメンさんは真剣な表情でそう聞いてきた、だがしかし「お前は一体何なんだ!!」と聞かれたら、答えは一つしかないでしょう。そう思い俺はとあるお方の名ゼリフを借りてこう言った。

「通りすがりの環境超人だ、覚えておいてくれ」

少しアレンジを加えて言い放つ、そうすると俺の体は完全にその場から消え去り、俺も意識を失った。意識を失う直前神様に似た声が。「あっ、ヤバイまたしくじったかも」とかなり不吉なことを呟いてるのが聞こえてしまった。

イケメン悪魔さん（サーゼクス・ルシファー）ｓｉｄｅ

「通りすがりの環境超人だ、覚えておいてくれ」

そう言い残すと彼は、エコガインダーはその場から完全に消え去った。彼の気配を探してみるものの、もう完全に消えてしまっていた。環境超人エコガインダー、突如この

戦場に現れてセラフォルーを助け、あの二天龍をたった1人で倒しそしてすぐに消えてしまった謎の戦士。しかも彼はまだまだ余裕があったように見えた、あの様な人物がもし冥界に居たのなら見つからない訳が無い。もしくは別の所から来たのだろうか？だとしたら何処から来たのか？しかし、考えても答えには辿り着けない。今はこの勝利に感謝しよう。彼が敵なのか味方なのかはまだわからないが、彼は何処かに消えてしまった。それにこれから色々と大変になってくる、とにかくまずは目の前の事から片付けていこう。

「環境超人エコガインダー……また会う時があるなら、その時は是非話しを聞いてみたいな」

私は彼にかなり興味を持った。それに彼を元にして何か作品を作ってみよう。本当にこれから大変になりそうだ。私は不謹慎ながら心を弾ませながらこれからの事を考えていた。

To be continue……

第４話　Ｓとの出会い／Ｄの改心

『いや～、本当にすまない。最近風邪を引いたんだがそれの後遺症なのかどうも転送が上手く行かなくて今度はもっとちゃんと準備をするからまた待っていてくれないか』

「本当に次はお願いしますね、それじゃまた探索してきます」

ため息混じりにそう言うと神様の気配が遠のいていった。さて、また探索をするとしよう。今度もまた空が紫色をしている。先程と同じような場所なのだろう。取り敢えずエコガインダーに変身してから辺りを散策する。ここら辺は森の中のようで自然豊かだ、周りからは鳥のさえずりが聞こえてくる。その鳥の声に耳を傾けていると、何処からか女性の叫び声が聞こえてきた。それに気づくと俺はすぐに周りの自然からこの近くで女性が襲われてないかを聞いてみる。

これはエコガインダーに追加した能力の一つ、植物の声を聞くことが出来る。これはいざという時のために取ったのと、植物と話しをしてみたいから取ったのだ。そして聞き出してみた結果、今立ってる場所から3時の方向に女の子が襲われているというのを聞き出した。

そのことを教えてくれた花に感謝をしてからそっちの方に走っていく、エコロジーパ

ワーで身体能力を強化してなるべく早く着けるように走った。そして一時走ると壁際に追い詰められた女性と女性を取り囲む男達が見えた。

　見た感じ女性は女の子のようだ、しかも周りに目玉が浮いてる。そして男達が喋っているのも聞こえてきた。

「ふん、こんなに手こずらせてくれるなんて妖怪の餓鬼の癖に手間取らせてくれたねおい、コイツと一緒にいたもうひとりの方はどうした？」

「それが追い掛けてすぐに消えちまったんです、まるでそこにいなかったかのように」

「ちっ、逃がしてんじゃん。まぁコイツを捕まえて僕の眷属しちゃえば取り敢えずＯＫだね。聖職者じゃないのが気に食わないけど、その後は僕の奴隷にでもしてやるか」

「くっ……このゲス共が、貴方達の心の中は吐き気が出るほど邪悪ね」

「ハッ、そんな風にいきがってられるのも今のうちだよ。悟りの妖怪が何でこんな所にいるのか知らないけど君を眷属にすれば僕も楽々上位の連中にくい込めるさ」

　ここまで聞いてる間に俺は周りの自然から力を借りて奴らの死角になっている、真上にある木の上に登り何時でも手が出せる場所にいた。それにこれ以上コイツらの話しを聞く意味もないのであの女の子とゲス共の間に割って入るとしよう。そして俺はポーズを決めながら奴らに向かって叫んだ。

「待て!!!!!」

そう叫ぶと奴らは狼狽えたように周りを見始めた、俺は上にいるっていうのに何処を見てるんだか。するとその内の1人が俺に気づくと周りに聞こえるように大声を上げながら俺の方を指さしてきた。

「あっ、あそこだ!あそこにいるぞ!」

「お前、一体何者だ!」

その中のリーダー格のような男がこちらに問いかけてくる。それとここで分かったが奴らはどうやら5人組のようだ。これなら楽かもな。

「少女の助けを求める声を聞き、悪を討つためにやってきた男!環境超人!!!!エコガインダー!!」

そう叫ぶと俺はその場から大きく飛び、少女と男達の間に割って入った。

「エ、エコガインダー!!嘘をつけ!!こんな場所にエコガインダーがいる訳がない!どうせコスプレかなんかだろ!おいお前ら、コイツを殺せ!!」

その掛け声と共に周りの奴らが空中に玉を出してこちらに発射してきた、俺はそれをはじき飛ばしてまずは後ろの女の子を守るためエコロジーシールドを展開した。エコロジーシールドとは名前の通り攻撃を防ぐ為の盾だ、ドーム型に展開することで周りからの攻撃を防ぐことが出来る。それを後ろの女の子の周りに展開する、そこから動くなとひと声掛けてから前の男達に向かって駆け出していく、狙うのは先程指示を出してい

た真ん中にいる男。

何処かの本で読んだことがあるのだが、最初にリーダー格の奴を倒せばその周りの奴らは手を出さないと書いてあった。それに従いまずは奴を倒す、男の懐に入り込んで考えなしに全力で鳩尾を殴る。すると驚くほど奴は抵抗なくそのままゴキャッ！と骨の折れる音を響かせて後ろに吹き飛んでいった。そして数十メートル後ろの木にぶつかりそのまま倒れた。そうすると周りの奴らは目に見えて恐れているのが分かるほど顔が青くなっていた。

「今帰ってここで起きたこととやった事を全て忘れれば何もしない、だがもし俺かあの女の子に手を出す若しくはここで起きたことを誰かに話すというなら……五体満足で帰れると思わないでもらおう」

ちょっと声のトーンを落としながら周りの奴らに言ったそうすると、何度も何度も顔を縦に振り一目散に逃げていった。俺は何もしない、俺は、な。周りの自然に声を掛けて奴らをこの森で迷わして1、2週間この森で過ごしてもらう。何でもここには強い魔物が多くいるらしく、無事に帰れる保証はないらしい。……ゲス野郎だったが御冥福をお祈りする。頑張って生きて帰られるといいな。

さて、先程エコロジーシールドで守っていた女の子の所に行って展開を解除する、そうして取り敢えず頭を撫でてやる。あんな事があって不安だろうから少しでも安心し

てくれればと思っての行動だ。そこ、ロリコンとか言うな。それとエコロジーパワーを少女に浴びせる。これで傷の治りも早くなるだろう。

「大丈夫だったか?アイツらは逃げてったから取り敢えず今は大丈夫だぞ」

撫でながらそう優しく言った、そうするとその子は俺のことをジーッと見てからフッと笑った。安心……してくれたのか?笑ったんだからきっと安心してくれたんでしょう。

「フフッ、ごめんなさい。貴方の心を覗いて見たら私を安心させようて想いがすぐに伝わってきたのよ。だからつい笑ってしまったの、ごめんなさい」

そう言ってお辞儀をしてくるが、顔は笑みが浮かんでいる。まぁ笑って安心してるようだしオールOKということにしよう。その時周りの草が俺にあることを教えてくれた。無駄に頑丈だなアイツは、そして女の子が途端に表情を変えて俺に危機を伝えてくれようとしていた、しかしそれを先に教えて貰っていたので俺は後ろを見ずにそのままエコロジーシールドを俺と女の子の周りに展開した、すると黒い玉が俺の後ろの方に何発も当たっていた。その連撃がやんだ時には周りは砂埃が舞っており俺達はその中に包まれる形になっていた、そうすると先程ぶっ飛ばしたリーダー格の男の声が聞こえてくる。

「ハハハハハッ!アヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!!この僕をコケにしやがって!!僕には真

なる魔王の血が流れてるんだ！お前みたいな昔の戦争で名が少し知れただけの奴が、僕に勝てるわけないんだよぉぉぉぉぉぉ!!!!」
俺のことか老害って、俺まだ高校生ですよ?老害どころかピチピチの１０代ですよ。ごぶれさぁな、しかも俺が死んだと思ってる。まだ死んでないからね、生きてるからね？取り敢えず周りに展開していたエコロジーシールドを解除して声の聞こえた方を向いて必殺技を出す準備をする。イメージするのは、地球が生み出した光の巨人の技。頭の葉っぱのような形をした場所にエコロジーパワーを貯めていく、するとそこから緑色の鞭のようなものが伸び始めるそして準備が完了する頃には砂埃が晴れて俺の姿が奴に見えた、必殺技を放つ前に見えた奴の顔は青ざめたものだった。
「デュワァァァァァァァァ!!!!」
　奴は光に包まれてその場で倒れ付した、どうやら完全に気を失った様だ。これは別に殺すための技ではない、というか威力を低くして放ったから倒れるぐらいですんだのだろう。あいつがこれからどうなるかは知ったことじゃない。今はあの子がどうなったかだ、そして後ろを振り返るとあの子は凄く……むせてました。解除した時には砂埃こっちに来てなかったけど、俺が必殺技撃った時の衝撃で周りの土が舞い上がったのだろう。後ろにいたので周りに舞ったのが結果的に彼女の方に来たのだと思う。

「大丈夫か?取り敢えず安心して話せる場所に移ろうか」
　そして彼女の手を引きながら周りの草や木に秘密の場所を教えて貰ってその場所に歩いていった。その場所は池の近くで、周りの景色も綺麗な場所だった。但し……筋肉ムキムキの魚人が居なければもっとロマンチックだっただろうけど、その景色を見て2人で苦笑いしつつ自己紹介から始めた。
「俺の名前は雄輔、君の名前は?」
「私はさとり、古明地さとりよ。私は他人の心を読むことの出来る『悟り』と呼ばれる妖怪の種族なの」
「へ〜、じゃあ俺の心も読めたりする?」
「ええ、そうね……今貴方はアイスが食べたいって思ってるでしょ」
「おお!大当たり!凄いねぇ、本当に人の考えが読めるんだ」
　そう言うとさとりちゃんはすぐに暗い顔になった。どうやら聞いちゃいけないことを聞いてしまったようだ。その場の雰囲気がすぐに悪くなるのを感じた。ここはどうにかしないとな、うーん。ここで一発ショートコントでもしようか?取り敢えずネタは二つ程浮かんでいる。それを披露する時が来たのか!?そう悩んでいると隣でクスクス笑う声が聞こえてくる、そっちを見るとさとりちゃんが笑っていた。
「私のことを気味悪がる人は沢山いましたけど、私のことを思ってくれる人は身内以外

で貴方が初めてです。それとそろそろ素顔を見せてくれてもいいんじゃないですか？」
　そう笑いながら言うさとりちゃん、そういえば今の今までエコガインダーのままだった。それを聞いて変身を解いた、俺の見た目はまぁ普通だ。髪は黒だが、前髪は少し茶色になっている。前は眼鏡をしていたが転生した時視力が良くなって眼鏡はいらなくなった。身長は前測った時は１８０ｃｍ位だったかな。
「改めて、雄輔です。よろしくねさとりちゃん」
「ええ、よろしくお願いします雄輔さん」
　にっこり微笑んでお辞儀をしてくるさとりちゃん、しかしこの時忘れていたことがあったのだが神様が話しかけてくれたおかげで思い出した。
『おーい雄輔君、こっちの準備が完了したよ。これなら次は絶対に大丈夫だ、信じてくれ』
（おー、もうそんな時間ですか。それじゃあお願いします。）
「さとりちゃん、本当にすまないんだけどこれから少し遠くに「分かってますよ」
　さとりちゃんに事情を話そうとしたら話してる途中で僕の唇に人差し指を当てて次の言葉を紡ぐ前に分かっていると言ってきた。
「私は心を読めるんですよ、全部分かってます。名残惜しいですけどここでお別れです」
　そう言うさとりちゃんは何だか悲しそうに見えた、ここで泣かせたら男が廃る！どう

にかして励まさないと。そう思って俺はさとりちゃんの頭を撫でながらこう言った。
「別にお別れって訳じゃないよ、ただ会えるのはかなり先になっちゃうけど。必ずまた会えるよ、約束する」
さとりちゃんの目を見ながら真剣な顔でそう言った。いつになるか分からないけど必ずまた会いに来る、そう心に決めた。そうするとさとりちゃんは驚いた顔をしてからまた笑ってこう言った
「はい、必ずまた会いましょう」
そしてその言葉を聞いた時、また体が光に包まれていった。
「それじゃあ、またねさとりちゃん」
「また会いましょう、雄輔さん」
僕が手を振ってそう言うとさとりちゃんも手を振り返してくれた、そしてまた意識を失った。今度は成功してくれ、そう願いを呟きながら。

さとりｓｉｄｅ

エコガインダー、雄輔さん。私を救ってくれたヒーローだ、彼は私が心を読めるからといって気味悪がったりせず、普通の女の子として私と接していた。実際は私の方が遥かに年上なのだが、私は別に気にしなかった。それよりも私を１人の女の子として見てくれたことが嬉しかった。私の数少ない知り合い以外で私を、私と見てくれたのは雄輔さんが初めてだった。長い間迫害されていた私にとって、雄輔さんはとても魅力的な男性に見えた。こういうのを人間世界では確か……チョロイン、そう呼ぶらしい。よく意味は知らないけど何となく察しがつく。

でも別になんと言われても私はどうでもいい、私を私として見てくれた。それだけで充分だし、しかも私のことを助けてくれたのだ。

これだけ理由が揃えば十分でしょ?それと一言言っておくけど私はあの大戦に現れた伝説の戦士、エコガインダーだから惚れた訳じゃない。

惚れた男がエコガインダーだったのよ。

……誰に言い訳してるのかしら、私。

リーダー格の男ｓｉｄｅ

僕は恵まれていた、僕の親は真なる魔王の血を引く。そして僕もその血を引いていた、その恵まれた環境にあぐらをかいて努力など殆どしてこなかった。それに僕は元聖

職者、シスターを陥れて自分の物にするのが好きだった。彼女達を自分の元に引き入れ、絶望の表情を見るのが好きだった。彼女達を教会から追放されるようにあの手この手を使って、僕のところにやってきた所でネタをばらして絶望させる。そして僕の物にする、そんなことを何度もやっていた。

そして最近近くに妖怪が出てきて、何でも悟りの妖怪らしい。そいつを僕の眷属にすればかなりの戦力になる。そう思って金で雇った男達と共にその妖怪を捕まえようとした、しかし実際は失敗ばかりだった。悟りの妖怪と共に来た鬼に大半は殺られた、同じくカラスの羽を生やした女と猫耳の女にも何人も殺された。

何とか悟りの妖怪の姉妹を捕まえようとしたが片方には逃げられてしまった。何とか姉の方を追い詰めたが、そこには何と、古き大戦に現れた伝説の戦士、エコガインダーが現れたのだ。嘘だと思った、何処かの誰かが善人ぶって出てきただけだと思った。すぐに倒してこの妖怪を眷属にしようと思っていた。しかし結果は、周りの男達の放った魔力の玉をはじき飛ばし、目にも止まらぬ速さで僕の懐に入り込み、僕は数十メートル吹き飛ばされた。

不意をついて僕の最大の力を振り絞って作った魔力弾の雨をエコガインダーに当てた、勝ったと思った。これで生きてる筈がない、コイツの死体を持って行って、僕が一躍有名人になるだろう。そう思っていたしかし、粉塵が消え去った時既に奴は僕を倒す

為の準備を終えていた、奴と目が合った気がした、そして次の瞬間僕は……緑の光に包まれて意識を失いそうになった。その時昔の記憶が蘇ってきた、まだ本当に子供の頃の僕が見えて無垢な笑顔で、エコガインダーの話しを何度も読んでくれも母にせがんでいた。僕はその絵本の中のエコガインダーを必死で応援していた、何度も読んでもらったことがあるけど、それでも僕は絵本の中のエコガインダーを必死に応援していた。そしてその絵本を読み終わったあと。母がいつもこう言っていた。

「この絵本に出てくるエコガインダーのように、強く優しい子になってね。私の愛しいディオドラ」

僕は何時もその言葉に頷いていた、大きくなったら、困った人を誰でも助けられるように強く、優しい悪魔になる。それが口癖だったのに、いつしかそんなことを忘れていた。今更こんなことを思い出すなんて、もう遅い、僕はその憧れのエコガインダーに倒されたんだ。それが最後の救いかもしれない。エコガインダーは最後に、昔のことを思い出させてくれた。でも、もし願いが叶うなら。虫のいい話だが罪を償いたい、僕が陥れてしまった彼女達に謝りたい。許してもらえないのは分かってる、でも、今度はもう道を踏み外さないと誓うから。

ーーーーーーーーだからどうか、もう1度僕に……ーーーーやり直すチャンスを下さいーーーーー　そう呟いた直後僕は完全に意識を失った。

目を覚ますと僕は地面に仰向けになって倒れていた。僕は……生きている？最初はかなり困惑したが、次第にわかっていった。

彼だ。

エコガインダー様が、僕にチャンスをくれたんだ。どうしようもない僕に、もう１度だけやり直すチャンスをくれたんだ。それが分かったらいてもたってもいられなくなり僕は家に急いで帰った。来た時とは違い、すんなりと家まで帰りつくことができた。

ここからだ。ここから僕の新しい人生が始まるきっと最初はとても険しい道を進むことになるだろう。でももうけして道を踏み外さない、与えられた最後のチャンス、けして無駄にしない。そう心に決め、僕は家に帰った。ここからやり直すそう心に強く、強く誓って。

To be continue……

第５話　Ｒｅ：ゼロから始める同居生活

―雄輔ｓｉｄｅ―

目が覚めるとまず飛び込んで来たのは木や草、花などの植物たちだった。そして空を見上げれば雲一つない晴天、よく知る青い空が目に写った。その景色を少し堪能していると、頭の中に声が響いてきた。神様の声だ。

『よし！今度こそ成功したぞ！今いる場所は駒王町の森の中だ。因みに今は原作よりも４年程前に飛ばしたからね』

そう言う神様の声は弾んでいた、かく言う僕もようやく目的の時代に来れたから安心した。だが直ぐに頭にある疑問が浮かんできて、そのことについて質問をした。

「え？どうして４年前に飛ばしたんですか？」

『特訓をするのには時間が必要だろう？大丈夫、君の年齢も原作と合うように少し幼くしたからね』

「……え？」

『今の君の年齢は……大体１３歳位だよ』

「……アイエエエエエエエ!!嘘でしょ！……て本当に小さくなってるぅ!!!!」

衝撃の言葉を受けてすぐに近くの池に自分の姿を確認しに行ったら、本当に身長が低くなっていた。まさか本当に遅なくなっているとは……神様の力恐るべし！まぁ次元を超えて転生なんて出来るんだからこれくらいへでもないんだろうけどね。しかし本当に驚いたなぁ……自分の体に起きた出来事に暫し放心してると今度は僕の住む家について話を始めた。

「君の住む家だが……この森の近くに少し大きめの家を建てておいた、好きに使ってくれ。後金銭面に関しては心配しないで欲しい、こちらから提供させてもらうからね」

「そこまでしてもらって大丈夫ですか？ていうか、自分の預かり知らぬ所からお金が入るって……ちょっと怖いですね」

「いや別に犯罪じゃないんだから……ただ自分の知らない所から定期的にお金が入るだけさ」

「だからそれが怖いんですよ…」

「まぁまぁ、小さい事を気にしてたら禿げるぞ……さぁ！近くの家まで案内するから、私の指示通りに進みたまえ」

そんなこんなで近くの家まで案内された……近くって言っても片道１０分位だったかな？家は町中から外れた怪しい家みたいだった。しかも変に大きいからますます怪しい感じになっていた。きっと１週間もしない内に幽霊屋敷とか言われると思う。

まぁ、それはそれで人も寄り付かないだろうし良いけどね、外見はよくわかった。次は内装だ、神様から手元にこの家の鍵を転送してもらい、いざ中に入ってみると……凄く……豪華です。

いや本当に豪華なんだよぉ!!正直こんな広い家1人で扱いきれないよ!!!!これは少し大きい家じゃなくて、豪邸だよ!!庶民派の俺はびっくりだよ!!ハァハァ……良し、落ち着いた。取り敢えず間取りを確認しよう、一階と二階がある。広いリビングにキッチンルーム、長い通路に多い部屋。しかも図書室みたいな所もある。２階には部屋のみ、それでもその部屋の中にはテレビと机、本棚と衣装ケースに少し大きめのベッド。窓は２つついてる。こんな感じの部屋がたくさん（数えるのは面倒だったし何より数えると頭痛くなりそうだ、それくらい多い）１人でこんな家に住めとか鬼畜か。無理だよ、１人じゃ宝の持ち腐れじゃ済まないレベルだよ。

もう……なんか疲れた。寝よう、よくよく考えたらドラゴンと戦ったり変なヤツと戦ったりして、今になって疲れが襲ってきた。それにそろそろ日も暮れる。そんな訳でお休みなさーい。スヤァ……

ーー次の日ーー

さて、おはよう皆さん。今は朝の７時、飯を食って体を鍛えて行きます。取り敢えず

某一撃男のやっていた訓練をしていこう。まずは腹筋からだな……１００回か…辛い……よし！頑張ろう。

ーー少年特訓中ーー

つ、疲れたぁ……もう足が生まれたての子鹿状態だよ。しかし、この状態で１０キロ走るのか……途中から歩くかな、倒れたらどうしよ…その時に考えよっかな。取り敢えず走ろう、そのついでに近くの道筋とか覚えよう。よっしゃー！走るぞー!!

ーー少年ランニング中ーー

いやー驚いたなぁ、まさか2キロ走ったら兵藤て書いた立て札が飾られてる家を見つけるとは……そういえば彼は今何歳なんだっけ、原作から四年前だから……１３？まぁ大体俺と同じくらいでしょ。取り敢えず今は折り返しでもうすぐ家に着く、と言っても途中から足震わせながら歩いてたんだけどね。おかげで道行く人に変な目で見られたよ、しかしもうすぐ家に帰りつく。そう思いルンルン気分で家に向かったのだが、その

ルンルン気分も直ぐに打ち消されることになる。何故なら……家の前に女の子が倒れていたからだ。

「ちょっ！・ええ！・何で女の子が、いやそれよりも！・ちょっと君！・大丈夫!?」

慌てて駆け寄ってまずは脈を確認する、どうやら脈もあるしちゃんと息もしてる。取り敢えず外傷は見当たらないから、家に連れてって寝かしておこう。話しを聞くのはそれからかな。

そして女の子を担いで俺は家に急いで帰った。

結局その日1日は彼女は起きず、翌朝になってようやく目覚めた。その間は自分で飯作ったり、風呂入ったり、彼女を手当したりした。そして彼女が目を覚ましてから、話しを聞いてみた。どうやらどうしてここに倒れていたのかは、本人も覚えていないらしい。それと彼女の名前は弦巻マキ。そう、皆さんご存知の弦巻マキさんです。腰まである長い金髪、自己主張の激しい胸、チャームポイント（？）であるヘッドホンと頭の上にある2本のアホ毛。うん、かわいい。

それとどうやら自分のことも分からないらしい、所謂記憶喪失である。

それなら家に住むば？と誘ってみた。正直こんな広い家に1人とかおかしくなりそうだ、だから同居人が欲しい。それがもしマキちゃんなら尚更同居人に欲しい。最初は迷惑をかけられないと断っていたが、俺のコウショウ＝ジツによって何とか言いくる

（ゲフンゲフン…説得をすることができた。

そして家の中を案内して、部屋もあげた。因みに場所は俺の隣の部屋だ。そして改めて、お互いに自己紹介した。

「この家の主の雄輔です、よろしくマキちゃん」

「改めまして、弦巻マキです！よろしくお願いします、マスター!!」

うんうん、元気のあるいい子だ……えっ？マスター？

「マキちゃん、マスターって……俺のこと？」

「はい！」

「いや、何でマスターって呼ぶの？普通に雄輔でいいけど」

「いえ！マスターはマスターですから、だから私はマスターって呼ぶんです」

訳がわからないよ（キュップイ

マスターだからマスターと呼ぶ……うん分からん（思考放棄）まぁ、いいか別に。困ることでもないし、こっちが慣れればいい話だ。

「うん、分かった。マスターでもシスターでも好きに呼んでいいよ。じゃあ改めて！これからよろしく！」

「はい!!」

こうして、俺とマキちゃんの同居生活が始まった。これからきっとここでの生活はとてもハッピーになると思う。因みに次の日朝起きたら、何処からか引っ張り出したエプロンを着て、朝食を作ってくれているマキちゃんがいた。とても美味しかった。

第6話　ひまわり畑で激闘を

「でぇりゃぁぁぁぁ!!!!」

掛け声と共にパンチとキックの連打を浴びせる、しかしそのどれも彼女に防がれてしまう。先ほどからずっとそうだ。

「ふん、所詮この程度ね。私の大切な花を盗もうとするなんて……タダでは済まさないわよ」

「だからそれは誤解ですって！話聞いてくださいよ!!」

さっきからこの繰り返しだ、あっちが誤解してるのに。何故か俺が盗人扱いされている。ここまで連れてきた花は何も言わずにだんまりしてるし、そろそろ本当にヤバイ状態なんだが、こっちは攻撃当てられないのにあっちの攻撃は当たるし、どうしろってんだ。

どうしてこうなったんだろうか、確かこの前には何やってたっけ……

――回想――

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

「はいマスター、行ってらっしゃいです！」
　確か今朝マキちゃんに見送られて、家を出た。向かう先はここに飛ばされた時に目が覚めた森だ。あそこで鍛えようと思う、けどその前にあそこで鍛えてもいいかどうかそこにいる植物達に聞いてみないとね。
「というわけでどうですか？」
【なんで僕に聞くんだい？他にも色々な奴がいるのに】
「いや、近くにいたからだけど……それよりどうなの？」
【僕じゃなくて長老に来てよ、道案内はしてあげるからさ】
　――まあ、どうなるか僕じゃ分からないけどね。そう言ってまずは長老樹という木について教えてくれた、何でもこの森の一番大きな木が長老樹と呼ばれており、駒王町全体の植物を統べるとてもすごい木なんだとか。
　そしてナチュラルに移動をするコイツ、ちなみに先程から会話をしているコイツはそれなりに大きな木だ。それが移動している・・・・・・・普通の人が見たら卒倒するだろうな。
　そして、森の奥に進むと開けた場所に出た。そして少し先には、湖と木があった。
　その木は、樹齢二百年近くはするんじゃないかと思うほど大きかった。
　湖のほとりにある巨木はただ静かに佇んでいた。

【この方が駒王町の植物を統べる長、長老樹様だよ。あとは自分で頑張ってね】
そう言うと彼は元来た道を戻っていった、思いっきって長老樹に話しかけてみようとした……が、その時。
【ここに人が来るのは何十年振りかのぉ……さて、何故このような場所に来たんじゃ少年】
先に長老樹さんの方から話し掛けられた、その声は本当にお年寄りといった感じだ。田舎に居そうな子供に優しいおじいちゃんみたいな雰囲気もある。そんなことを考えた後、ここに来た理由を話した。この森で修行をさせてほしいと。
そう言うと長老樹さんは一時悩み、1つ質問をしてきた。
【そんなことを言う人が居るとはのぉ、別に拒否する訳では無いが、少年は何やら特殊な人らしいな。是非ともお主の持つ力をわしに見せてくれんかのぉ】
どうやら俺の力をお見通しらしい、流石は駒王町の植物を統べる長老樹さんだ。まぁ俺としても別に構わないので早速披露することにした。まずは変身、ポーズはブラックサンの変身ポーズをとった。そして今度はエコロジービームを打つ。目標は目の前にいる長老樹さん、エコロジービームは周りの環境にいい影響を与えるから大丈夫大丈夫（多分）
それから長老樹さんから離れた位置に付き、両手を前に突き出し、掌を合わせる。

そして腰の位置まで手を持って行き玉を包み込むように構える。
その際にエコロジーパワーを手に集中させ、凝縮させていく…所謂かめはめ波のポーズだ。
「か～め～は～め～……」
掌にエコロジーパワーが集まっていく。次第に掌から光が漏れだす。ここまでくれば準備完了。後は長老樹さんに向かって…
「波ぁぁぁぁぁぁッッッ!!」
放つ。俺の手から緑色の光線が放たれ、それは長老樹さんに直撃した。
最初は驚いた様子で苦しげな声を上げていたが次第に声は収まり最終的には歓喜？の声を上げていた。それに放ったとは言ったがそこまで長くは放っていない。長くて１０秒位だ。それにそんなに力は込めなかったし。
【おぉ…いきなりわしに打つから驚いたが……これはすごいのぉ。力が溢れてくるわい、ふむ、よかろう。改めてこの森での修行を許可するぞ】
「やった！ありがとうございます！」
【他の者たちにも伝えておくから好きに修行をしてよいぞ】
その言葉を聞いて浮かれる俺、早速どんな修行をしようかと考えていると、もう一つ伝えることがあったようで、今度は真剣な雰囲気で話してきた

【好きに修行をしていいと言ったが、この森にはある妖怪が住んでおるのだ。名は風見幽香、フラワーマスターとも呼ばれており。とてつもなく強い妖怪じゃ、奴だけは怒らせるでないぞ】

その名前を聞いて何か思い出しそうになったのだが、結局思い出せず。忠告を聞き入れていざ修行を開始しようとしたとき、一本のひまわりに呼ばれて一面ひまわりだらけの畑に行き（森の中とは思えないほどの広さだった）そこで先ほどの女性に盗人と間違えられエコガインダーに変身して今しがた戦っている状況になったということだ。

「くそっ！あんたの攻撃速すぎるんだよぉ！」

そんな泣き言を言いながら女性の攻撃を何とかギリギリ避ける。しかしこの状況、はっきり言って完全に俺の不利だ。こちらは体力をかなり消費しもう息をするのもきついくらいだ、しかしあちらは息一つ切らさず攻撃を仕掛けてくる。

こちらが息を整えていると急にあちらが仕掛けてきた、俺はその攻撃を避けようとしたが避けなかった――――否、避けれなかったのだ。先ほどとは全く比べ物にならない速さで拳が飛び、俺の腹部に深々と刺さった。

「ゴハァッ!!!!」

そのまま真後ろに吹き飛び木を何本かなぎ倒して俺の体は止まった。

三人称ｓｉｄｅ

雄輔は木に背もたれながら俯き、何とかこの状況を打破しようとしていた。だが戦力差が凄まじかった、確かに相手が余裕をもって戦ってるのは分かっていた、しかしこれほどの差があるとは思ってもいなかったのだ。

そして考え事をしている間に先程雄輔を吹き飛ばした彼女が降りてきた。

「あら?まだ生きてたの?さっさと死ねばせめて苦しまずに済んだのに」

「生憎と、誤解されたまま死ぬのもはご免ですからね。まだやりますよ」

そう言って立ち上がり相手を見据える雄輔、先ほどは戦闘中だったためしっかりと姿を見えなかったが、その容姿は街中で見かければ十人中十人は振り返るほど整っており、肩を少し越すくらいまで伸びている癖のある緑の髪、深紅の目をしている。服装は白のカッターシャツにチェックの入った赤のロングスカートを着用し、その上から同じくチェック柄のベストを羽織っている。首には黄色のリボンをし、日傘をさしている。

先程からじっと自分を見ているだけで、動こうとしない雄輔に女性は笑顔を見せ、相手を煽るような言い方で言った

「どうしたの?まだやると言っておいて全く動こうとしないけれど?やはり口だけの男なのかしら?」

大袈裟な動作も加えて煽る目の前の女性、しかし雄輔は特に気にしている様子はな

い。そしてこう答えた

「これからやるのは、ちと覚悟がいるんですよ……しゃぁっ！覚悟完了！いくぞこらぁ！」

そう言った直後、雄輔の体から緑色の光が溢れだし、オーラのように雄輔の体を包んだ。今雄輔は自分の体が耐えられる範囲ギリギリでエコロジーパワーを開放していた。その全てを身体能力強化に当てており今の雄輔は先程よりも数段上の新地能力を手に入れていた。

「あら、すごいわね。人間にしてわ。あっそうそう、私は風見幽香と言うわ。短い間だけどよろしくね」

「嘘でしょ…あなたが風見幽香なんですか。これは僕も年貢の納め時かな」

ひきつった笑いを見せながら、雄輔はここに連れてきたひまわりに恨みを呟いた――

――もしここで死んだら化けて出てやる――――そう言った直後

「オラァ‼」

地面を蹴り、幽香に肉薄して全力で拳を振るう。さすがの幽香もここまでとは思っておらず、咄嗟にガードして攻撃を防いだ。その力は案外凄まじく、幽香は威力を殺しながら地面に着地した。こんな状況でも日傘は手放さず、閉じた状態で片手に持っていた。

「フフフ、ぼろぼろの体の癖によくやるじゃない。褒めてあげるわよ」
獰猛な笑みを一瞬浮かべ、すぐに元の相手を見下すような笑みに戻した幽香。しかし、その一瞬を雄輔は確かに見ていた。
「ハハッ、そちらは全く効いてない癖によく言いますね。あんな攻撃ガードせずとも余裕でしょう」
雄輔も笑いながら言う、雄輔は先程の強烈な一撃ですでに満身創痍、一周回って痛みを感じなくなっているのだ。そんな状況で使っているこの技、今使っている技は身体能力を上げる反面、体力の消費が尋常ではないのだ。なのでこんな無駄口をたたいている暇はなくさっさと追撃をしたいのだ。だが今の幽香には隙が無く、攻めるに攻めれない状況なのだ。
「じゃあこちらも、少し上げていくわよ」
そして地面をえぐるほどの力で飛び出して雄輔に肉薄し、すぐさま拳を顔めがけて放つ。雄輔はギリギリそれを捉え咄嗟に顔を横に動かし避けた、幽香の拳は頬を掠め雄輔はすぐさま反撃。腹部を狙って拳を振るう、しかし幽香はこれを閉じている日傘で防ぎ。お返しに蹴りを雄輔の横っ腹に食らわせ、地面に叩き落とした。その衝撃で地面は揺れ、大きな砂埃を上げた。
「できると言っても、所詮は人間。今ので死んだでしょうね、まぁ少しは楽しめたわよ」

そう言ってその場から背を向け去っていく幽香――――――――その時、幽香の背中に向けて緑色の光線が煙をかき分け放たれていた。幽香はそれの気づいた様子はなく、そのまま直撃するかと思われたが、先程同様今度は日傘で光線を弾き飛ばした。

「まさか、生きてるなんてねぇ……あなた、面白いじゃない」

その目線の先には、両腕を前に突き出した状態の雄輔がいた。

「こっちもまさかだよ、完全に隙をついたと思ったんだけどね」

「確かに、普通の相手なら決まっていたでしょうけど…相手が悪かったわね」

――――全くだよ――――そう心の中で呟きながら幽香を見据える雄輔。

「そんなあなたに……そうね、とっておきを見せてあげるわ。これを防げたら大したものよ。精々頑張って防ぎなさい」

そう言い幽香は雄輔に向かって右手を突き出し、そこに力を溜めていった。最初は訳が分からず静観していた雄輔だが、何かやばいと思い咄嗟に自分を覆うようにエコロジーシールドを展開する。

「マスター……」

右手に集まっていた光が七色に変化し、チャージが完了した。

「スパーク」

瞬間、雄輔の視界は七色の光に包まれた。

「ぬおらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ‼‼」

しかし、意識までもは飲まれなかった。かろうじて堪え、何とか押し留まろうとしているが、その抵抗もむなしくどんどん押されていく。

「こんな場所でぇ…死ねるかぁぁぁぁぁぁぁぁ！‼‼‼」

もはや今の雄輔を支えているのは、根性だけである。しかし幽香が急に威力を上げってきた、それにより雄輔を守っているシールドも亀裂が走りはじめてあといくら持つかわからない状態だ。

そして……その攻防の後

「なかなかやるわね、人間」
「そりゃどうも、どうですか僕の機転は」
　――機転――と言っても至極簡単なことだ。あの一撃を防いでる最中、シールドが壊れそうになったタイミングで地面に穴をあけてその中に飛び込んだんだ。最もタイミングを見誤れば雄輔の体が粉みじんになっていたが
「すごいわねぇ、座布団を一枚上げたいくらいの気分だわ」
　冗談交じりにそんなことを言いながら、拍手をする幽香。
「是非とも貰いたいですね・・・・ゴフッ」
　その場で吐血する雄輔、当然だろう。この戦いは二天竜との戦いのときとは違い体の損傷が激しい。
　しかもそんな状態で力を酷使して挙句の果てには光線を（シールドがあるとはいえ）真正面から受け止めるなんて事してたら…吐血位する。寧ろ吐血だけで済んでることがおかしいレベルだ。
「あーもう…無理…また、気絶かよ」
　そんな言葉を残して気を失う雄輔、その際に変身が解けた。幽香は倒れた雄輔を見て、このまま殺すのは少し惜しいなと考えた。まだ本気など全く出していないが、それでもここまで耐えた奴は久しぶりだ。しかも妖怪や天使、堕天使（カラス）に悪魔（コウモリ）などではなく人

間がだ。
「やっぱり、ここで殺すには勿体ないわね」
そう結論付けると幽香は雄輔を担いで自分の家に連れ帰った。
余談だが、雄輔の家ではただ今マキちゃんが未だ帰らぬマスター（雄輔）を忠犬のように待っていた。

――――雄輔ｓｉｄｅ――――

「知らない…天井だ…」
いやマジでここ何処？俺確かさっきまで風見幽香さんと勝負（一方的にこちらが負けるゲーム）をしていたはずなんだけど・・・・・・・・あっ！今思い出した！風見幽香って東方ｐｒｏｊｅｃｔの登場人物じゃん。確か・・・・・・あれ？どんな人物だったっけ？うーむ、思い出せん。いやまて・・・断片的にだけど思い出してきたぞ！
「あら、起きたのね」
俺はその声を聴いて即座に布団から飛び出し、臨戦態勢を取る。
「なによ、貴方をここまで運んで治療してあげたのは私なのよ？お礼の一つくらい言っ

たらどう？」
「あッ、ありがとうございます」
「よろしいわ」
・・・・・・・・・・え？この人が、治療した？さっきまでこっちを殺そうとしてたのに？どうゆうこと？
「まあ、貴方の聞きたいことくらいわかってるわよ。まず貴方に謝罪をしようと思ってね」
唐突にそんなことを言って頭を下げる幽香さん。うん、取りあえず当の本人置き去りで話し進めるのだけはやめてくれ。
「貴方最初にあったとき勘違いだって言ってたでしょ」
ああ、そういえば言ってたね。でも話し聞いてくれずにそのままバトルしてたからほとんど忘れてたわ。
「あの後、あなたを家に連れてきて治療した後にとある花が言ってたのよ。私がここに連れてきたって」
おれをここに連れてきた時の花だな。なんだ、ちゃんと誤解を解いてくれたならそれでいいや。欲を言えばもっと早くに言ってほしかったな。
「そこで貴方にお詫びをしようと思ってね、考えてきたのよ」

あれ？幽香さん案外優しくね？確か記憶ではドＳとかアルティメットサディスティッククリーチャーとか呼ばれてた気がするけど

「私が考えた貴方へのお詫びは・・・・・・」

これならむしろやさしい妖怪じゃんなんだもうびっくりしたなーはははははっははは!!

「これから毎日私が貴方を『鍛えて』あげるわ！」

ははははは・・・はは・・・ふぁ？

「ええええええええええ!!!それお詫びじゃないでしょぉぉぉぉぉぉ!!!!」

そんな絶叫が幽香さんの家に響く、しかし当の幽香さんはどこ吹く風。

「あら？そんなことないわよ？私直々に教えてもらえるなんて、こんな素晴らしい思いを受けられるのは貴方だけなのよ？これが私なりのお・詫・び・よ」

「俺の命が耐えられない件について」

そう挙手する私、幽香さんの訓練とか命が１００個あっても足りないよ！

「その点も無問題よ、私の妖力とあなたのエコロジーパワーを使えば腹に風穴空いてもすぐに治せば死なないわよ。ね？これで万事解決」

問題しかねぇ、えーいやうれしい申し出だけどね。やっぱりさ～～

「あ、因みに」

「はい？何ですか？」

「拒否権は……

無　い　わ　よ　」

知ってた（絶望）

もういいや、何でも来いよ。矢でも鉄砲でもマスパでも何でも降ってこーい（自暴自棄）あっ、そういえば家にマキちゃん一人でいるじゃん。まずいじゃん。絶対怒られコース確定だよ。やばい早く帰ろう。

――それから――

幽香さんに事情を説明すると、ついでに私も行くと言い出して、結局二人で夜遅くに私の家に帰りました。家に帰ると、マキちゃんが泣きながら俺を叩いてきたりして、もう本当に謝ることしかできなかった。それからあったことを説明すると再び泣き付か

れた。それとちゃっかり自分も修行に参加するとか言い出した。俺はもちろん止めたけど、結局幽香さんが許可出したので。もう何も言わなかった。

それから遅い夕食を食べて風呂に入りベッドにダイブしてそのまま就寝した。因みに幽香さんはマキちゃんと同じ部屋で寝た。まあ、あの二人はたぶん仲良くやれるんじゃないかな？あくまで多分、だけどね。

翌朝はマキちゃんと幽香さんがエプロン姿で台所に立っており非常においしい朝食が取れた。最高だ。

まあこの日から厳しい修業が始まる、正直何処まで持つかわからんけど、できるだけ頑張ってみる。

さて、さっきから幽香さんが早く来いとうるさいのでここらで日記を終えるとしよう。

次書くのがいつになるか分からないけど。最後に一度は日記に書きたい決め台詞でも書いてみようか

あれ？そいえばなんで幽香さんはエコロジーパワーの事知ってたんだろう？

あれ　し　こう　が

まと　ま　ら　な

あ　つ　い

は　ら　へ　た

か

ゆ

う

ま

第７話　修行開始!早すぎるパワーアップ!?

「今度こそもらったぁ!!」

そう叫んで幽香さんの腹に拳をぶつける、それは見事命中し、幽香さんを地面に叩き落とした。

「お見事、ようやく私に一撃当てられたわね」

舞い上がっていた土煙を吹き飛ばしてそう言う幽香さん、先程の一撃はかなり力を込めたのだが応えた様子はない。

「この様子ならさらに力を上げていってもよさそうね」

瞬間、幽香さんは目で捉えられないほどのスピードでこちらに近づき、肺の近く、鳩尾付近に拳を叩き込み、俺を遠くに吹き飛ばした。吹き飛ばされた先で、意識が飛びそうになりその瞬間、今までの訓練(地獄)を思い出した。

――――――回想――――――

まず最初に幽香さんは俺の力について聞いてきた。知っているんじゃないかと聞いてみると、どうやらひまわりから聞いただけで、実際には詳しく知らないようだ。まあ特に隠す理由もないから大体のことは喋った。エコロジーパワーのことや、変身したら身体能力が大幅に上がることなど、他にも色々喋った。

さて、ここで前説明できなかったことについて説明しよう。え？そんなの覚えてない？・・・・・・とにかく説明しよう。

赤いドラゴンとの戦いの時に使ったサンダーブレイク。なぜ使えたのかについてだが、ぶっちゃけるとエコロジーパワーを使って自然の力の一部を操ることが出来るのだ。

ほら、エコガインダーって一応地球の戦士じゃん？だから使えてもいいかなーと思って能力を追加したんですはい・・・・・チートかな？（自業自得）

まぁ、これで説明出来なかったことも説明できたしＯＫだね。それで、まず最初の修行だけど、マキちゃんは基礎体力作りからだった。俺は・・・・・変身せずに素の状態で幽香さんと組手することだ。・・・・・死んだな（確信）

これにも一応理由はあるらしい、幽香さん曰く「変身して身体能力が上がるなら、素の状態での体力があれば、更に上がるでしょ？１を１００倍するより、１０を１００倍した方がより大きな数字になるでしょ？それと同じようなものよ。てことで、貴方は変

身せずに私と組手よ」と強制的に始まったのだ。流石にエコロジーパワーでの身体能力強化は許可してもらった。素の状態では上手く使えないし、何よりこれないとマジで死ぬ。流石に修行で死ぬのは勘弁だ、死にかけるならまだしも。

それでまぁその日の訓練だが……三途の川に何十回と片足どころか腰まで浸かりまくった。しかも川の付近に鎌持って居眠りしてる赤いツインテールの和服美女がいた。最後に川に浸かった時は緑髪の幼女にお尺（？）で頭叩かれてた、しかもその時その幼女と目が合ったのだ。てかあれどう考えても四季映妃と小野小町でしょ、見た目完璧に一致してたもん。

それと余談だが、この日俺は腹の同じ箇所を１０回程貫かれた。その度に幽香さんの妖力と俺のエコロジーパワーで回復してたけど、お陰で腹にでかい傷跡が残りましたよ畜生。でもカッコイイから許す。

それから1ヶ月は避けるのに専念し、二ヶ月目から要約攻撃に転じれる様になった。これでもかなり筋がいいと言われたよ。因みにマキちゃんも修行に参加するようになった。何でもマキちゃんは神器（セイクリッド・ギア）というのを持っていたらしい、基礎体力作りの途中にその神器が目覚めたようだ、それから組手に加わる様になった。

マキちゃん曰く「これでマスターと一緒に戦えます!!」と張り切っていた。

マジマキマキ天使、思わず抱きついちゃったよ。まぁその後幽香さんに殴り飛ばされ

たけどね、女の子に安安と触るんじゃないわよと言われて。そりゃ俺が悪いけどさ……解せぬぅ。

先程マキちゃんも組手に参加したと言ったけど、一緒に組んで幽香さんと組手してるのでわなく。1対1で交代で組手してる、幽香さんが言うには、最初はある程度の実力をつけるのが先で、チームプレイは二の次だと。まぁ、こっちに実力が無くて仲間の足引っ張る訳には行かないからね。

それでまぁ、先ほどの訓練は三ヶ月目突入してやっと一撃当てられた訳だ。てかそろそろ起きないと、また幽香さんに体に穴あけられちまうな。そう思い、俺はこの走馬灯から無理矢理意識を戻した。

ーーー回想（走馬灯）終了ーーー

ーーー三人称視点ーーー

先ほどの一撃を受けて、肺から1cc残らず空気を吐き出した雄輔。再び肺に空気を取り込んだ時、身体に奇妙な感覚が走った。それと同時に痛みが引いていったのだ。雄輔は困惑していた、いきなり痛みが引いていったのだから当然だ。そしてその理由を考えた時、一つの答えが見えた。それは・・・・・波紋だ。

転生する時に頼んだ波紋、それが今目覚めたのだ。恐らくは先ほど一撃が、丁度ジョナサンが突かれた肺のツボと同じ箇所だったのだろう。なんという偶然、そして更に、雄輔の身体にもう一つの変化が起き始めた。

先程から使っていたエコロジーパワー、これを使っていると自分の体の周りに緑色のオーラが出るのだが、それがどんどん金色になっていっているのだ。

イメージとしてはスーパーサイヤ人みたいな感じである。

「こりゃあ一体・・・・?」

しばし自分の身に起こっていることに驚いていると、幽香が雄輔のところまでやってきた。そこで雄輔の身に起きている変化に幽香もまた驚いていた。

「随分と代り映えしたわね、雄輔」

「ああ、だけどその分効果は絶大だぜ?」

「あらそう・・・・それじゃあ、口だけじゃなくて、実力で示してもらおうかしら」

「いいぜ…でもその前に、一つ許可を出して欲しい」

「何かしら?」

「エコガインダーに変身させてくれ、じゃないと全力が出せないんだ。それにこの状態も生身のままじゃ直ぐに限界が来ちまう」

幽香はしばし考えた後、それを許可した。その後直ぐにエコガインダーに変身した雄

輔。そして両方が構え、相手を見据えた。

「行くぞぉ！」

そう言って地を蹴り、幽香に向かって飛び出した雄輔。今の雄輔は無意識で波紋の呼吸をしており、それによりこの金色のオーラを纏ったまま戦えるのだ。

幽香と肉薄した雄輔はそのまま全力で連打を打ち出す。幽香もそれをガードしようとしたが、それよりも早く雄輔の連撃が幽香に当たった。そこから蹴りで打ち上げ、幽香を空へと吹き飛ばした。雄輔もその後を追いかけ、追い打ちで拳を叩きつけて遠くの森へ撃ち落とした。

雄輔自身が、先程の威力に驚いていたが。関心をしてる暇などなく、既に身体に限界が近づいていた。

「流石にエコガインダーに変身しただけじゃ長くは持たねぇか……一気に行くぞぉ！」

そう言うと雄輔は全身にエコロジーパワーを巡らせて、それを纏い幽香に向かって飛んだ。

「フフフ……こんなにも楽しい戦いは何十、いや何百年振りかしら……来なさい！雄輔ぇぇぇぇぇ!!!」

幽香は既に雄輔のやることを分かっていた、然しながら避けるなどの事はせずに、そのまま正面から受け止めることを選んだのだ。幽香は両手を伸ばし掌を合わせ、そして

腰の位置まで手を持って行き玉を包み込むように構えた。そこには既に虹色の光が溜まっていた。それを見てより力を高める雄輔、徐々にエコロジーパワーの形が変化し、龍のようなオーラになっていた。
「喰らえぇぇぇぇぇぇ！！！！エコロジーーーーー！！！！！スパーーーークッッッッッ！！！！！！」
「マスタァァァァスパーークッッッッッ！！！！！！」
幽香が両手を前に突き出し、マスタースパークを雄輔目掛けて放つ。雄輔はそれを正面から受け止め、その状態でも尚前へと進もうとしていた。両者の攻撃は最初は拮抗していたが、徐々に雄輔が押し始めた。
そしてついに雄輔が完全に押しきり、幽香がエコロジースパークに飲まれた瞬間、既に限界が来ていた雄輔は気を失った。気を失う直前に雄輔は、幽香の背から翼が生えたのを見た気がした。

ーーー幽香ｓｉｄｅーーー
危なかったわね……まさか私が一瞬とはいえ本気を出さなきゃいけないなんて、ここまでの威力だったとは思わなかったわ。三ケ月弱でここまで成長するとは、脅威的な成長速度ね。本当に人間かしら？それとも人間特有の謎の成長力を発揮したのかしら？どちらにせよ面白いからいいのだけど。それにしてもあの力、今まで使っていた力とは

似ているけれど全く違う力だったわね。まるで二つの力が混ざりあっている感じだったわ。

ふふっ、本当に面白い。本気を出したのはいつ以来かしらね、あの悪魔達と戦った時以来かしら?あの時は4人がかりだったけど、今度は1人の人間に本気を出させられたなんて。私も弱くなったのかしら?まさかねぇ……それは無いわね。

「それにしても……さっきまで戦ってた相手の隣で、よくもまぁこんなに寝れるものね。尊敬するわ」

その目線の先には地面で横になり、熟睡している雄輔が居た。

「今度からの修行はもっとレベルを上げていこうかしら、そっちの方が面白そうね」

にっこり笑顔でえげつないことを言う幽香、そしてこれから降りかかる過酷な試練(という名の地獄)を雄輔はまだ知らない。

「幽香さーん!マスターー!何処ですかーー!?」

あら、あの子もここまで来たのね。心配性ねぇ、別に何も起きないっていうのに。とにかく今は、雄輔を家に連れ帰ってゆっくり休ませるとしましょうか。

そして幽香は雄輔を担いで、家まで連れて帰った。結局雄輔は翌日の朝に目を覚ました、これからは波紋の呼吸の練習もしていくことになった。それとマキちゃんにまたも怒られて今度買い物に付き合うことにもなったりした。雄輔的には何の問題もなかっ

たり、むしろいいことだったりした。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

第８話マキちゃんと雄輔の休日

「マスター！早く行きますよー！」
「今行くよー、それじゃ幽香さん留守番お願いします」
「わかったわ、２人で楽しんできなさい」
その言葉にお礼を言って俺はマキちゃんと一緒に街に出掛けた。
昨日の激闘のあと、一緒に買い物をしに行く約束をしていたのでこれから街にデートに行きます！（ドヤァ！
いいでしょう？例え普通の買い物でも脳内でデートと置き換えればとても楽しいんだぜ？それじゃ行ってきます。
さて、とりあえず目的のスーパーに着くまでの間、波紋と新しいエコロジーパワーについて説明しよう。
まずは波紋だが、これは昨日の件以降今もずっとやっている。何故出来ているのかというと説明に困るけど。うーむ、呼吸の違いで分かるんだよ。普通の呼吸は、スゥゥゥ，ハァァァ。波紋の呼吸はコォォォォ、て感じだ。うん、こればっかりは本人の感覚だから分からないのも仕方ない。そういうもんだと受け止めてください。

二つ目新たなエコロジーパワーについてだけど、これは『　波紋　＋　エコロジーパワー　＝新エコロジーパワー　』という訳である。え？何でこの二つが合わさるのかって？うーむ、実際分からないんだよね。感覚的にはこの二つを混ぜ合わせる感じ、コーヒーとミルクを混ぜるみたいな。まぁなんでもいいじゃない、医療で使われてる全身麻酔だって、どうして効くのか分からないんだから。それに全然害はないし、むしろこっちにはプラスの要素しかないんだから、無問題だよ。

そんなことを考えてると、マキちゃんが少し不機嫌そうに振り返った。

「もう！マスター！ぼーっとしてないで、折角の２人きりのデートなんだから、楽しもうよ！」

「うえ!?デートって……買い物に来ただけじゃないの？」

唐突にマキちゃんの口から出たデートという言葉に動揺を隠せない、マキちゃんとデートとか嬉しさで倒れるわ。

「全く鈍いなマスターは～、男女が二人っきりで街中に買い物に行く、これをデートと言わずして、何をデートと言うんだい！」

「いや、デートっていうのは好きな人と行くものだよ？」

そう言うとマキちゃんは呆れた顔、それにわざとらしく肩を竦めてこう言った。

「ふぅ、これだからニブチンは困るなぁ～、好きな人の前以外でデートだよ！なんて言う

わけないでしょ？全くマスターは鈍いね～」
「えっ？それってつまり……」
そこまで言いかけてマキちゃんに唐突に腕を引っ張られ
「そこから先はまた後で！早く行くよマスター！」
「ちょっ…分かったからそんな引っ張らないでぇぇ！」
結局有耶無耶にされたまま２人で買い物をしていた、最初先程の話を意識してたけど、とりあえず今は頭の片隅に置いておこうと思い、２人で買い物を楽しんでいた。食材を買ったり、幽香さんへのお土産に髪飾りを買ったり、近くのゲーセンによって２人でゲームをしたりと満喫していた。それから昼頃になって噴水のある公園でベンチに座って二人して休憩していた。
「いや～疲れたしお腹空いたね、マスター」
「そうだねぇ……じゃあ、おススメの料理屋があるんだけど、そこ行く？」
そういうとマキちゃんは目を輝かせてこちらを見てきた、上のアホ毛がブンブンと横に揺れている。
結局そのお店に行くことになった、この町に来て早三か月、最初の一か月は街を見て回ることなんてできなかったけど、二か月目からは、ちょくちょく町の色々なところを見て回っていたのだ。その時に見つけた料亭？がおいしかったので以来、休みの日は大

体食べに来ている。おかげで気づいたらお店の人とも気軽に話せる仲になっていた。そのことを話しながら歩いていると件のお店についた、名前は『巡る幸い』亭

ここの料理がまぁ美味しいのである。

ーーー三人称ｓｉｄｅーーー

店に入ると鈴の音が店内に鳴り響く。するとすぐさまよく通る声で挨拶が聞こえてきた。

「らっしゃーせー…って雄輔じゃない、あっちの席が空いてるわよ」

そう言って指を指すリフィル、折角なのでそちらの方に座らせてもらうことにした。するとすぐに雄輔たちの席にやってきてオーダーを聞いてくる。

「さぁ、注文を言いなさい」

雄輔はすぐに注文を決めて、いつもので、と言う。マキちゃんは、やはり初めて来た店でもあるからか、メニューとにらめっこをして唸っている。ふとリフィルがこちらを向いて、

「そういえばこの子は？貴方が話してたマキちゃんかしら？」

そう聞いてきた、ここによく来るようになってから、マキちゃんや幽香さんのことをつい、話してしまった。それでも厳しい特訓をしているとのことだけで、幽香さんが妖怪だったり、マキちゃんが神器保有者だということは、一言も言っていない。そうだよ、

と雄輔は答えるするとリフィルはマキちゃんの一部分に目を向けてぼそりと
「何食べたらこんなにでかくなるのかしら」
と言った、雄輔はその言葉を聞き取っていたが、敢えて聞こえないフリをした。するとマキちゃんもメニューが決まったようで、それを注文すると
「分かったわ、注文を繰り返します。ハンバーグ定食が1つ、エクストリームパフェが1つ、以上でよろしいですね」
2人が頷くと、リフィルは厨房へと向かった。リフィルが厨房に向かったのを見計らってか、マキちゃんがこんなことを聞いてきた。
「そういえば、さっきの人は誰なんですか?とっても親しそうでしたけど」
そういえばマキちゃん達にはまだ話してなかった、リフィルとはこの料亭に通うようになってから少しづつ話すようになってきた。最初はさん付けで呼んでいたのだが、彼女の方からさん付けはやめてくれ。と言われて以来リフィルと呼んでいる。そう伝えると、マキちゃんは目を細めてジト目でこちらを見ながら水を飲んでいる。何か気になることでも?と聞いてみるが、
「別にー」
と不機嫌そうに呟くだけである。何故急に不機嫌になったのかに俺が頭を悩ませていると、リフィルがこちらに料理を運んで来た。とりあえず出された料理を食べて、腹

を満たし、お会計をしてから店を出た。帰り際にリフィルに
「あの子不機嫌そうだったけど、貴方何したの？」
と聞かれた、心当たりがないというと、まぁ頑張れ。と無責任な応援をもらった。

ーー雄輔ｓｉｄｅーー

先程からマキちゃんは口を聞いてくれない、今は買い物も終わり家路についている、だが残念なことに未だ不機嫌の理由が俺には分からない。さっきから考えているけれど、全く分からない。もう思い切ってマキちゃんに聞いてみよう。それ以外方法が思いつかん！
「あのーマキちゃん？どうしてそんなに不機嫌なんでしょーか？」
「……」
ダメだこりゃぁ……思い切って聞いてみたけど、答えは帰ってこなかった。ちくしょうこれはつまり自分で考えろということだな、一体何が理由なんだ？こうなったのは巡る幸い亭に行ってからだよね、つまりそこで俺が何かしてしまったとしか考えられない。一体俺は何をしてしまった？考えろ俺ー!!そうこうして俺が頭を悩ませていると、突然マキちゃんが話しかけてきた。
「マスターはあのリフィルって人どう思ってるんですか？」

「……はい？」
「だーかーらー！リフィルさんのことをマスターはどう思ってるかって聞いてるんです!!」
えー？何故そげなことを聞くのです？まぁそうだなぁ……俺にとってリフィルは、友人……より少しランク高い人かな？そこまで特別な思いがある訳ではないし、かと言ってどうでもいい訳では無い。俺にとってはリフィルも大事な友人だ。
「俺にとってリフィルは……大事な友人だね。結構話してきたし、どうでもいい人ではないよ」
「そうですか……じゃあリフィルさんのこと、マスターは好きですか？」
「はぁいいい!?」
ちょっといきなりどうしてそうなるのーーー！いや確かに彼女は美人だし、それなりにスタイルもいいし、この町で始めての友人だけど、いきなり好きって感情が出てくる訳じゃないですよ！そりゃ異性としては魅力的だし、いい人だけどまだそういう感情はないしそうなるにしてもまずはきちんとしたお付き合いから始めていくべきだと私は思うんですはい！」
「マスター、途中から声に出してるよ」
「ええ！何処からァ！」

「いや確かに、の部分から」
「ほぼ全部じゃあん！」
　何でそんなに口から出てるんですかねぇ！俺基本的に考えが口から出るタイプじゃなかった気がするんだけど、こういう時に限って口から出るのは非常に困りますね！
「マスター…」
　そう呟いた方を反射的に向いた次の瞬間、マキちゃんの顔がこちらに急接近しており、唇と唇が触れ合った。
　その状態で固まって数秒、あるいは数分たっただろうか、まるで時間が止まってしまったかのように感じていた、今俺は確実にマキちゃんとキスをしている、正直急なことに頭が追いついておらず。かろうじてキスをしていることを認識できている。そうして俺にとっては長い時間に感じたこの時はマキちゃんの方から離れることによって終わった。
　今俺の鼓動はまるで特訓の時に限界まで体を動かした時のように早くなっている。頬もきっと真っ赤になっていることだろう。今目の前にマキちゃんも顔を真っ赤にしている。そうすると今度は俺に抱きついてきて、顔を俺の胸に埋める体制になった、そのままの体制でマキちゃんは話を始めた。
「これは私からマスターに対する宣戦布告です。何時になるかわかりませんが、必ずマ

スターを振り向かせて見せます。それまで覚悟しててください」
「いや、あのいきなり過ぎて何が何だかわからないんだけども」
「今の私ではマスターの彼女になるにはまだまだ実力不足です。そのためにまずは力を付けます。料理ももっとレパートリーを増やして、ほかのこともできるように練習します」
「お、おう…」
「それから、またマスターに正式にお付き合いをお願いします。ですからさっきのは宣戦布告なのです。分かりましたかマスター」
「う、うん。まぁ分かったよ」
「そうですか……よし！それじゃあ早速帰りましょ！マスター！」
そう言って突然手を引っ張り帰りを急かすマキちゃん。こっちは突然のことにやっと脳みそが整理をつけようとしてる時なのに、切り替え早スギィ!!
「ちょっ！分かったからそんな引っ張らないでぇぇ！買ってきた豆腐が崩れるぅ！」
そんな叫びを他所にマキちゃんは俺を引っ張り続けていた。
本当にマキちゃんはマイペースだなぁ……それに告白？いや、宣戦布告をされた訳だけど……本当に急すぎるよマキちゃん。まぁこっちとしては嬉しいし、男冥利に尽きるわけだけどね。とりあえず……今日の晩飯を楽しみにしておこう。もちろんこの宣

戦布告のことはきちんと覚えておくつもりだよ。そんなことを考えながら俺はマキちゃんに引っ張られつつあった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

1第9話　日常と明日への不安

ここは駒王町のとある森の中、そこでは二人の男女が戦っていた。女性の方は肩で息をしながらもなんとか男の攻撃を受け流していた。一方男の方は相手に攻撃の隙を与えないように、続けて連撃を繰り出していた。

傍から見ればいじめの現場のように見えるかもしれないが、決してそんなことはなく、この二人はただ組み手をしているだけである。不意に女性の方が口を開いた。

「相変わらず容赦がないね、マス…タァ!!」

掛け声と同時に相手の攻撃を流しつつその勢いを利用して顔面に肘を打つ、男にとっては予想外だったのかその攻撃に反応が一瞬遅れた。

（これは確実に決まるッッッ!!!!）

そう確信していたのだろう、彼女の顔には笑みが浮かんでいた。しかし彼女は失念していた、今目の前にいる人物は、少々常軌を逸していることを。

（これは予想外だったなぁ…まさかこんな形でカウンターを打たれるとは…）

男は自分の顔面に勢いよく迫る肘を見ながら呑気なことを考えていた、全く焦らずに現状を確認し始める。先程男は女性の顔を狙い右の拳を放った、しかしその拳は流され

お返しに肘を撃ち込まれようとしていた。今から顔に空いている左手をもってきても多分間に合わない、そう考えると男の判断は早かった。男は避けるのではなくあえて、あえて自分からその肘に向かって頭突きを繰り出した、到底人が人を打つときに聞こえるはずのない鈍い音があたりに響いた。

「いったぁぁぁ～～」

二人そろって後ろに倒れ女性は肘を、男性はおでこをさすっている。

「マスター頭固すぎだよ～」

「そういうマキちゃんも肘打ち勢いありすぎでしょ！頭われるかと思ったよ」

そう言うと二人ともため息をつきながら、大の字になって寝ていた。

「今回は引き分けだね」

「はぁ～でもマスターは今回身体強化してなかったんでしょ？もしされてたら私の負けだったよ」

「まぁ、この組手は俺が強化なしでどこまでやれるかを測るためでもあったからね」

二人してそんな話をしていると不意に上空から声が響いた。

「雄輔もマキもなかなか様になってきてるじゃない」

二人が声のしたを見るといつもの日傘をさした幽香が空から降りてきた。

「今日はそろそろ終わりにして、もう帰りましょうか」

その言葉を聞くと、二人は即座に立ち上がり服についた埃を払うと幽香と一緒に自宅へと帰っていった。

――――料理中――――

「マキちゃんの神器の特性ってどんな感じなの？」

唐突にそう聞かれたマキちゃんは少し驚いたようだった、今にして思えばマキちゃんの神器は知っているけれどその特性は全く知らないのだ

「そういえばマスターはまだ見た事なかったんだっけ？これが私の神器、偉大なる雷と炎を司る籠手（グレート・エレキ・ファイヤー・グローブ）だよ」

そう言うと包丁を握っているマキちゃんの手が一瞬輝いた後、その手は既にグローブに包まれていた

「へーこれがねぇ、見た感じは穴あきグローブみたいな感じかな」

先ほど俺が言った通り、見た目は穴あきグローブ。配色は深紅と黄色だ。

「でもさ、どんなことができるの？」

そう言うとマキちゃんは、フフフっと怪しく笑うと片手をＩＨに向けて

「見ててマスター、これがこの神器の力だよ！」

かざしていた手から雷が走る、すると何もしていないのにＩＨが勝手に起動したのだ。
「・・・・・・えっ？」
「ふふん、この神器は電気と炎を自由自在に操ることが出来るんだよ！」
そう自慢げに語るマキちゃん、それよりも俺はこんなことに神器を使ってもいいのかという疑問が浮かんできたが、マキちゃんの笑顔見てたらどうでもよくなったぜ！
「へ～便利な神器だね。戦闘にも使えるし、日常生活でも役に立つ」
「でしょでしょ！もしもの時はこのマキちゃんにまっかせなさーい！」
凄く・・・どや顔です。俺が褒めると、むふーという効果音が聞こえてきそうだった。それでこちらに胸を張っているのだ、大きな―メ《・》―ロ《・》―ン《・》が揺れていた。
因みに俺はむねは大きくても小さくてもどちらでもオッケーだ。関係ないし興味もないって？そりゃすまなかった。そんなことを二人で話していると、不意に後ろから幽香さんが抱き着いてきた。
「二人して何話してるのかしら」
「ちょっと急に抱き着かないでくださいよ幽香さん。今包丁使ってるんですから」
みんなは料理してる人に急に抱きつくなよ、割と危ないから。本当に指切りかねない

から。

「あらごめんなさい、それで？なんの話をしていたの？」

口では謝りつつも背中に抱き着いて離れない幽香さん……　まあもう慣れたけど。その状況にため息をつきつつも幽香さんの質問に答える

「マキちゃんの神器についてきてたんですよ、実際に見たことなかったし」

「あらそうだったの？」

理由？単純に見る機会がなかっただけだよ。

「まあこれでマキの神器についてもわかったでしょ。ところで今日の夕飯は何かしら」

「贔屓にしているお肉屋さんからもらった黒毛和牛のステーキです。」

あのお肉屋さん本当に謎、この前なんか普通の鶏肉買ったらサービスとして七面鳥を貰ったし……マジであの肉屋何なんだ……そして今回は牛肉買ったら黒毛和牛、まぁこっちとしては良いことばかりだし、問題なし！因みに俺は料理出来るからね？それにこっちには秘密兵器、クック○ッドがあるからね。

「随分と豪勢ねぇ……ま、それじゃあ早く夕食にしましょう。もうお腹ペコペコよ」

「はいはい、それじゃあ食べましょうか。あっ、マキちゃんそこのお皿取って」

「はい、マスター。これでいいよね」

そうして3人で夕食をとり、夜もふけてきた頃、一人部屋で自主鍛錬をしているとこ

ろに幽香さんが入ってきた。
「ノックくらいしてくださいよ」
「あら、ごめんなさい。でも今更こんなこと気にするような仲じゃないでしょ？」
一切悪びれた様子のない幽香さん、まあ確かに今更な気もするが、親しき仲にも礼儀ありだろうに……ほんと、今更だな、幽香さんはそんなこと気にする人じゃなかったや。
「それで何の用ですか？」
そう言うと幽香さんはいたずらっ子のような笑みを浮かべて、今ことを言ってきた。
「明日は、マキと二人で私に挑みなさい。もちろん全力でよ」
正直この言葉に俺は驚いた、いつもはこんなことは言わず唐突に言ってくるのが基本なのに、今日に限ってなぜこんなことを言ってくるのか。そんなことを考えていると
「それと私も、全力を出していくわ……この意味、分かるわよね」
そんなこと言いながら獰猛な笑みを浮かべる幽香さん。そのとき俺は明日の鍛錬は、今までで一番ヤバい鍛錬になると予想していた、しかし実際は、俺のその予想も軽々と超えることになる……いや、後々にはもっと面倒なことにも繋がるのだが、この時の俺には到底予想など出来ていないのであった。

To be continued……

第１０話　激戦

朝、朝食を食べてから幽香さんに呼ばれて俺とマキちゃんは幽香さんのひまわり畑《通称　太陽の畑》に来た。

今日はここで俺とマキちゃんＶＳ幽香さんでガチバトルをする。それにともない、太陽の畑を囲む様にして強力な結界を張ってある。

因みにこの対決を見るためにわざわざ長老樹がこの場所まで来てくれた。結界を張るのも手伝ってくれました、感謝します。

「いいわね、本気で来るのよ。さもないと……死ぬわ」

最初から羽を生やして空からこちらを見下ろしている幽香さん。

こちらはそれを地面から見上げている、一応今朝のうちにマキちゃんと少し作戦を考えてみた。成功するかは分からないけど、何も考えずに突っ込むよりはいいでしょ。

「じゃあ……行くよマキちゃんッ！」

「はい！マスターッ！」

その掛け声とともに俺の体は光に包まれ、エコガインダーに変身した。マキちゃんは手に偉大な雷（グレートエレキ）と炎（ファイヤー）を司りし拳（グローブ）（以降神器と呼称）展開した。

俺は即座にその場で金色の光を身に纏い飛び立ち、幽香さんに接近戦を仕掛ける。
だがそれをただ見ているだけの幽香さんではなく、弾幕を放ちこちらを近づけさせまいとしてくる。俺はその弾幕の隙間を縫うように飛び、幽香さんに先制パンチを繰り出した。
それを軽々と防ぐと、そこからは格闘戦へと移行した。そんな攻防を繰り広げている時、不意に俺は幽香さんから飛び退くように離れた。
それを疑問に思い幽香さんの動きが止まったその瞬間、雷の槍と炎の槍が幽香さんを貫き、そのまま地上に叩き落とした。その衝撃で幽香さんが落下した当たりに土煙が上がる。
そして俺は地上で先程の槍を投げてくれたマキちゃんに目を向けた。
マキちゃんはマキちゃんで、神器の特訓を行っていた。その中で雷と炎を自在に操れる様になったのだ。そこで、俺が近接戦闘を仕掛け
その間にマキちゃんが攻撃の準備をし、後は何時も一緒に特訓してるので、自ずとタイミングが分かる。他にも神器の使い方はあるのだが、それは今は説明してる暇がない。俺はマキちゃんの隣に降り立ち、土煙が上がっている方に注意を向けながら話をした。
「あの程度で倒れる人なら俺たちも苦労しないで済むんだがなぁ」

「うん、マスターの言う通りだよ。これで終われば苦労しないね」
まそんなことないんだけど、現に幽香さんは土煙が晴れると、まるで問題なしといった風であった。さっき貫いていたはずの体には傷一つない。
「なかなかいいわよ今の攻撃は、並みの蝙蝠（悪魔）ならさっきのでやられていたわ」
なんと評価までしてくれるのだ、ありがたくて涙が出てくる。幽香さんは肩にかかった砂を払いながら、こちらを見てにこりと笑う。そして先程墜落した時に消していた羽を再度展開する。
「今度はこっちから行くわよ、防いでみせなさい」
瞬間、俺の隣にいたマキちゃんは幽香さんと一緒にひまわり畑の中に突っ込んでいった。
「ッッマキちゃん!!」
俺がその場で叫んでも、すでにマキちゃんの姿は見えず、声も聞こえない。しかも周りのひまわりがこちらの行く手を阻むようにしている。おかげでもう二人の姿を完全に見失ってしまった。
俺はその場から上に飛びあがり、上から探そうとしたがその時、ひまわりが５～６メートル延びて二人を俺に見つけられないように妨害してきた
「幽香さんの能力か……めんどくさい事してくれるな」

こうなったら、マキちゃんが何とかこちらに合図を送ってくれるのを待つしかない。
頼むよマキちゃん

――マキｓｉｄｅ――

『防いでみせなさい』その言葉を聞いた直後マキは幽香から腹を抱え込むようにつかまれながら、そのまま連れ去られ雄輔と分断されてしまった。その時周りのひまわりが徐々に大きくなっていき二人を覆うように伸びって

いった。

「くっ!!放してください!!」

何とか抵抗しようと蹴りを入れても、まるで意に返さない様子の幽香はある程度雄輔と距離が離れたのか、マキを投げ飛ばした。

マキはその勢いのまま後転して着地とともにある程度距離を取り、幽香を見据えた。

「さて、まずは貴女がどこまで力をつけたか見せてもらいましょうか」

いつものような優雅な態度で、それでいて余裕はあれど隙はない。何度も見てきた、いわば強者の余裕というやつなんだろう。いままで何度も負けてきた、何度もこの余裕をかき消せなかった。でも今日こそは……

「幽香さんのその余裕を、消させてみせます!!」

「やってみなさい、マキ」
　その言葉とともにマキは幽香に向かい駆け出す。あらかじめ神器に溜めておいた雷を片手で幽香めがけて放つ、それを横に少し移動するだけでよける幽香
「それを待ってましたよ!!!!」
「ッッ!!」
　そこに合わせてもう片方の手で溜めていた炎を拳に纏わせ、ブローを放つ。脇腹に突き刺さる拳、思わず痛みに顔をゆがめ、動きが止まってしまう。その隙を逃さず相手に攻撃させぬよう、息つく暇も与えぬほどの連打を繰り出す。幽香はこれを腕をクロスし防いだ。
（今だ！）
　幽香が防御に専念しているときに、後ろに飛び退き、空に向かって炎を打ち上げる。ひまわりを突き抜けその場所に火柱を作り出した。
「貴女一体何を……まさかっ！」
　その直後マキの真横に空からエコガインダーが降りてきた、すぐに構えを取り幽香を見据える。
「待たせたな」
「そこまで待ってないよ、マスター」

二人は言葉を交わしながらも、警戒を怠らない。ここからは二対一の戦いだ。
「行くぞマキちゃん！合わせろ！」
「むしろマスターが私に合わせてよね！」
二人は同時に地を蹴り、まずエコガインダーが幽香に大振りながら、鋭い拳を放つ。それを片手でさばきもう片手でエコガインダーの鳩尾に拳を打ち込む幽香。
「がはっ・・・中々効く…が、捕まえたぜ！今だマキちゃん！」
両手で鳩尾に刺さった拳をつかむ、その時エコガインダーの後ろからマキが飛び出し、雷と炎を纏った拳を幽香の腹部に抉りこむ。後ろに吹き飛び地面を転がる幽香。そのまま奥の方まで転がり見えなくなってしまった。
「ハァァァァァァァ……」
両手を幽香の転がった方に突き出し力を溜める、緑色の光が収束していき眩い光が両手から漏れる
「デリャァァァァァ!!!!!」
緑色の光弾が軌跡を描きながら、放たれた――――が、
「なにぃ！」
「嘘ぉ……」
ひまわりが光弾の前に立ちふさがり、空へと弾き飛ばしてしまった。すると幽香がひ

まわり畑から空へと飛ぶのが見えた。飛翔し後を追うエコガインダー、マキも雷をその身に纏い飛翔する。

　周りを見渡すが、幽香の姿は確認できない。二人が左右を警戒していると、突然上空から虹色の光がマキを飲み込み、そのまま地面に落下していった。

「マキちゃん!!」

　思わず目をそちらに向ける、その隙にエコガインダーを狙って無数の光弾が豪雨のように降り注ぐ、それに反応し、金色の尾を引きながら光弾を避け、その現況へと向かって行く。

「やっと来たわね、待ち草臥れたわよ」

「そりゃあ悪かったなぁ、ならさっさと始めようぜ」

　肩を回し仮面の中で笑みを浮かべながら催促する雄輔。これには少し理由がある。この新エコロジーパワーは自分の力を飛躍的に上昇させるが、その反面体力を著しく消耗するのだ。

　最初からこの力を使っているため、表面上は冷静を装っているがすでに体力的には厳しいところに突入している。

「待ちなさい、貴方が体力がもう限界なのは分かっているのよ。その状態で私が持久戦を仕掛ければ確実に私の勝ちよ」

その言葉に思わず顔をしかめる、それを仮面越しに感じ取ったのか、もしくは元からそのつもりなのか、幽香はとある提案を出してきた

「お互いに今出せる全力の攻撃でカタをつけましょう」

「分かったよ、それじゃあいくぜ！」

その提案をエコガインダーはすぐ？んだ、両手を体の前で上下に合わし、その手を右腰に寄せ、力を溜める。その手に包まれるように緑色の玉が現れた。

「エコロジ――――……」

包まれた玉はやがて光の線を溢れさせて、その力を極限まで溜める

片や幽香は片手を前に突き出し、掌に虹色の光を凝縮させ、虹の玉を作り出している

「マスタ――――……」

直後、エコガインダーは幽香に用手を勢いよく突き出して緑の光線を、幽香は虹の光線を。それぞれ相手に向かって打ち出した。

「ビィィィィィィィィム!!!!」

「スパァァァァァク!!!」

二人の放った光線はぶつかり、周りの物をすべて吹き飛ばすほどの衝撃波をあたりにまき散らしながら拮抗していた。

「くッ、まだァァァああ！」

雄たけびを上げ、ぼろぼろの体に鞭を打ち、さらに力を出すエコガインダー。緑の光線は勢いを増し、相手の光線を上回る大きさで向かって行く。

「ふふふ、この程度じゃまだまだよ！」

そして幽香は左手を右手の横に持ってきた、すると更にマスタースパークの威力が上がり今度は幽香が押し出し始めた。

「うおおぉぉぉ、くそっ！まだか、まだ足りないのかっ！」

押されながらエコガインダーが感じたのは力の差、今のままでは勝てないという事実。このまま打ち合っていても押し負けるだろう。

これ以上力が出せないわけではない、だが確実に体の方が持たない。万全の状態でならともかく、体はもう限界を超えている。

「ち、チクショー――――!!」

すぐ目の前まで光線は迫っていた、そして抵抗もむなしくエコガインダーは光に飲まれてしまった。薄れゆく意識の中雄輔は……笑っていた。

to be continued……

第１１話　予感と予感と面倒ごとの気配

「痛い痛い痛い!!!もっと優しく治療してよマキちゃん!」
　痛い!マキちゃんの治療めっちゃ痛い!こんなふうになったのは半分自業自得とはいえこれはひどい!
「もう!マスターのバカ!心配したんですよ!」
　そういったマキちゃんは包帯を巻き終わったあと、背中を強めに叩いた。めちゃくちゃジンジンする。叩かれたところが。
「幽香さんも!もう少し加減してください!危うく畑ごと吹き飛んじゃうところだったんですよ!」
「あら、ちゃんと加減はしたわよ?だからこうして畑も無事だし、雄輔もいきてるわ」
　そう自慢げに語るが、結構被害は甚大だったりする。太陽の畑は無事だったけど、森の一部の木が倒れたり、打ちの花壇が危うく吹き飛ぶところだったり。まぁ、そこらへんはエコロジーパワーで何とかなったからよかったけど、家とか壊れなくて本当に良かった。
「まぁまぁ、マキちゃんも落ち着いて。何はともあれ、けがも妖力とエコロジーパワーで

治ってきてるし。結果的に被害はなかったからよかったじゃない」
　もし万が一森が燃えたり、花壇がぶっ壊れたりしてたら自責の念で家から一時出てこられなくなってたところだよ。
「はぁ……マスターがそう言うなら……それなら！これからご飯にしましょう！もう夜ですしね！」
「はぁいぃ!!夜ぅ!?」
　その言葉を聞いてすぐに窓の外を見ると、戦っている時にあった御日様はどこえやら、お月様が顔を出しているではあーりませんか。
「よし！飯にしよう！料理は任せた！」
　なんせ今の私は体動かすだけでも辛いからねー、お願いするのも仕方ないね。
　その後は特に何の問題御なく、みんなでご飯を食べて。ワイワイ今日の模擬戦の反省点や良かったところを言い合って、改善点なんかを見つけてから就寝についた。しかし、俺はこの時に、まさか原作の方に少しばかり影響を与えていたとは思いもよらなかったのだった……

冥界・某所にて

とある邸にて、一人の魔王が、巨大な力を感じ取っていた。

「先程の力の波動は一体……」

顎に手を当てながら、考え込んでいる紅い髪の男。彼はその力の感覚になにか覚えがあるような気がして、それについて頭を悩ませていたのだ。

――因みにこの力の波動とは幽香と雄輔によるビーム同士のぶつかった衝撃で起こったものなのだが。当の本人たちは特に気にも留めていなかったのであった――

「サーゼクス!!!さっきの力は一体!?」

扉を乱暴に開けて部屋に入ってきたのはメイド服を着た銀髪の女性だ。普段は決してこのようなことはしないのだが、あまりのことに些か冷静さを失ってしまっていたようだ。指摘される前に自分でそのことに気づくと、一度咳払いをして、いつもの態度に戻った。

「取り乱してしまいました。申し訳ありません」

「いや、いいんだ。僕もさっきまでかなり取り乱してしまった。あまりに急だったからね」

頭を下げて謝るメイドに、サーゼクスと呼ばれた男性はやめるよう手で促す。

「それよりもさっきの力だ……あれは一体」

「とても巨大な力を感じました…正直に申しますと、寒気がしましたね」
「グレイフィアが……これは、かなり大変なことになるかもしれないな」
そういう彼女の顔は少しだが、青くなっていた。サーゼクス自身も嫌な寒気を少し感じていた。これから先のことに関する不安。それに似たものも感じ取っていた。
「他のみんなにも連絡を、話し合う必要がありそうだ」
「わかりましたスグに支度を」
自分一人で悩んでいても何の結論も出てこないと考えたサーゼクスは、他の魔王とも話し合うためにグレイフィアに知らせを届けさせた。冥界に与えられる影響や、その他の不安事項も合わせて話し合う室要請を感じていた。
冥界の空は相も変わらず紫色だ。しかし、サーゼクスはその空模様がとても不安に駆られる色に見えていた。この先の冥界の道を、その過酷さを表している気がしたのだ。

――因みにほぼ同時刻に、天界と堕天使界でも、トップによる緊急の改案が開かれていた。――

～～～～ところ変わって、謎の森～～～～
「ん？この感じは…？」

桃色髪の女の子が筋肉ムキムキの半魚人と戯れていた時、懐かしい気配を感じた。
「さとり様～？どうかされましたか？」
「あ、お燐。いえ、少し…懐かしい気配を感じまして」
そう言いながらさとりと呼ばれた少女は空を見上げ、昔の恩人の事を思い出していた。昔話のヒーロー。その本物に助けられた時のことを。
「あー。さとり様？その与太話、まだするんですか～？嘘にしてももうちょっとマシな嘘をついてくださいよ～」
「あー！お燐まだ信じてないのね!?だから、本当にエコガインダーに助けてもらったのよ!!」
「心が読めなくっても、そのくらいの嘘分かりますって。夢見る乙女ももっちょっとマシな嘘をね？」
そこまで言ってお燐はプロレス技のコブラツイストをかけられてしまった。
「うーそーじゃーなーいー!!!」
「あー!!さとり様!!ギブですギブ!!」
「信じるまでやめません!!」
そういうと更に締め付ける力は増していって、お燐も流石にまずいと感じていた。ここは嘘でも信じていると言おうと思ったのだが。

「心の底から信じるまでやめません！」
「えーー!!さとり様～！勘弁してください～～!!」
悲しい従者の悲鳴が、森に響き渡っていた。そしてそんな最中、森にいる、一人の鬼が。静かに闘志を燃やしていた。
「楽しみだねぇ～、強そうなやつと会える予感がするってのは。クククッ」
最早机レベルの大きさの盃で、豪快に酒を飲みながら。鬼は静かに笑っていた……

To be continued

第１２話　出会った主人公。

「「「ハッピー‼ハロウィーン!!」」」
　ぱんぱかぱーん！とクラッカーを割り、紙吹雪やらビニールのひもなどがリビングを舞い、今年のハロウィンの始まりを告げる。あの地獄の特訓開始から早５か月、時の流れが速すぎてびっくりだ。因みにメンバーは、俺こと雄介、マキちゃん、幽香さん、リフィルの四人だ。因みに俺はＰＡＹＤＡＹのアメリカ国旗ピエロマスクをつけて、スーツにゴム手袋と簡単にできるコスプレ。マキちゃんは魔女。幽香さんはいつもの格好。リフィルも良く店で見かけるドレス？のような服装だった。
「私まで厄介になって悪いわね」
　そう言いながら開始と同時に肉を奪う勢いでとっていたのを俺は決して忘れない。俺の狙ってたチキンまで取りやがってこの野郎……
「まぁまぁ、マスター睨まないで。はい、これマスターの分のチキンね」
「ありがとうマキちゃん、この暴食魔人め…」
「私の前で隙を見せた貴方が悪いは雄介」
　マキちゃんからチキンを受け取りつつも、リフィルの手に渡ったチキンへの後悔があ

り、そっちをにらんでいたら勝ち誇った顔で言われた。己リフィル～!!
「チクショー!.みんな宴はこれからだ――!.飲め!.歌え!.騒げ!!.近隣住民なんてここでは一切気にしなくてもいいからー!.今日はどんちゃん騒ぎだー!!」
「イエーイ!!!!」
　女性約二名!(両方金髪)がついにお酒に手を出し、それを見て幽香さんは静かに笑い。酔っぱらった二人のどんちゃん騒ぎに俺が巻き込まれてもう。ストッパーがいなくなったこの宴は、次第に狂乱へと変わっていった――

　リフィル対マキ　野球拳
「アウト――!.セーフ!.世酔いの良い!.」
「引き分けかー、じゃ二人して脱ぎましょう?.」
「オーケー!.マスター!.私の裸を見て――――!!」
「脱ぐなぁぁぁぁぁ!!!!もうただ脱ぎたいだけだろお前らぁぁぁぁ!!!」

　リフィル対雄輔　野球拳
「なんで全部リフィルが勝つんだーー!!!!」

「ハーッハッハッハッ―!!さぁ!最後の一枚…脱ぎなさい雄輔!!パンツを!!」
「マスターのぉ、ちょっといいとこ見てみたい!はい、脱いで!脱いで!脱いで!脱いで!」
「コールするなぁぁ!!!」

マキ対雄輔　にらめっこ

「マスタぁ…、私ちょっと熱いのぉ…マスターで私を冷やして?」
「ヒュー!見なさいあの乳を!まるでメロンだわ!!!」
「にらめっこ関係ないやろぉぉぉぉ!!てかマキちゃん胸見せようとするのやめなさい!見える見える!」

ーーーーそんな紆余曲折あり、すっかり酔いが回って二人が寝たころ。庭にひっそりある休憩スペースで、幽香と雄輔が語らっていたーーーー
「大変だった…あの二人があんなになるなんて…」
「ふふっ、見ていてとても楽しかったわよ?」

口に手を当てて笑う幽香さんを、俺は恨めしそうな目で見ていた。この人第一に楽しんでて止めなかったし…己サディスティッククリーチャーめ

「だれがサディスティッククリーチャーよ、口を縫い合わせましょうか？」

「ナチュラルに心読むのやめてください。プライバシー、侵害　、ダメ」

「そんなことを今更気にすると思うの？」

そう言って肩をわざとらしく竦めている、貴女は気にしなくても俺は気にするんですがねぇ。

「諦めました。俺のプライバシーなんてなかったんや」

「そうよ、私に気にしろという方が無駄ね」

自覚ありかこのドＳ。これ以上この場にいるともっといじめられそうなので、俺は早々にこの場を後にして、森の散歩をすることにした。

「ちょっと夜風にあたってきます。すぐに戻りますから、先に部屋に入っててください」

「わかったわ。くれぐれも蝙蝠　には気を付けるのよ」

「？分かりました。気を付けますね」

そう言って俺は駆け足で森の中に向かって行った。

幽香さんが俺を見つめていることに、一切気づかずに…

ーーーー???ｓｉｄｅーーーー

やぁ皆！俺の名前は兵藤一誠。ちょっとエロに対するこだわりがあるだけの、いたって普通の中学生だ。

何でもこの森には幽霊屋敷があって、そこで夜な夜なサバトが開かれている……なんて噂話が流れていたから、このハロウィーンを利用して、噂のお化けに会いに行こうってしたのさ!!

俺と仲のいい友達簿二人を引き連れて森に入ったのはいいんだけど……なんと二人とはぐれちまったんだ、流石に怖くなってきたから。はやくふたりと合流して帰ろう……

「おーい！松田ー！元浜ー！どこだー！」

「……が力の……見つけて、つかまえ……」

お？何やら話し声が聞こえる、多分あの二人だろう！早速その声が聞こえる方向に向かって走って行って草を分けて飛び出した！

「やっと見つけた。二人とも早く帰ろう……ぜ…？」

そこにいたのは松田でも元浜でもなく、背中から羽？をはやしている二人の男だっ

た。え？なんだこれ、コスプレか？するとチャラそうな方の男が大柄な男に向かって話しかけた。

「どうする、見られたぞ」

「問題ない、さきの二人と一緒に殺そう」

え？何言ってんだこの二人……殺す？二人と一緒？

そういう二人の後ろには。光る鎖で縛られて木に吊るされている松田と元浜の姿があった。

「松田!!元浜!!大丈夫か！」

男二人の間をすり抜けて、二人に駆け寄る。二人とも意識はないがどうやら生きてそうだ。しかし安心はできない。何よりコイツらさっきものすごい物騒なことを言っていたからだ。

「おい、俺たちをどうする気だ！」

男二人に対してにらみを利かせるが、動じる様子はまるでない。寧ろニタニタと気味の悪い笑みを浮かべていた。

「どうするぅ？殺すに決まってんだろうが下等生物のガキが！」

「すぐに楽にしてやる、痛みを感じずに殺してやるんだから感謝しろ」

ニタニタ笑いながら、そんなことを平然と言い放つ二人。さっきからの雰囲気とい

い、こいつら普通じゃない！何より背中から羽生えてるやつが普通なわけがない！
「お前ら一体なんなんだよ!!」
心の中の恐怖を消すために、あらん限りの声を上げて怒鳴った。片方の男は舌打ちをして、声を荒げていってきた。
「おいガキ!!でけぇ声を出すんじゃねよ!!」
「ガハッ！」
咄嗟にこちらの腹を蹴ってきた男。その力はかなり強くて、俺は元浜と松田がぶら下げられている木にぶつかった。
「俺たち堕天使様に歯向かうんじゃねぇ、吠えるんじゃねよ人間!!」
「よせ、貴様のそういうところが我々堕天使の品を悪く見せるのだ。もっと自重しろ」
大柄な方の男が、チャラそうな男にそう言うと、チャラ男は渋々従って下がった。
「さっさと済ませるぞ、俺たちの仕事はまだ残ってるんだ」
「ははっ、そういえばそうだった、ここで起きた力の源を見つけて、一気に上位のやつらの仲間入りだぜ。ははっ!!」
そういうと男二人は手に光る槍?みたいなのを召喚して、俺たちに向けて投げようとしてきた!!
「くっそぉ…誰か……誰か助けてくれぇ!!」

「無意味なことを、死ね。人間!!」
背中を打ち付けられた痛みがまだ残ってる。体もろくに動かない。俺にできるのは声を上げることだけだった。でもそれも何の意味もなく。無情にも、二人の槍は俺たち三人を貫くために飛んできた。一瞬走馬燈が見えた。あぁ…俺たちここで死ぬんだ…そんな絶望に包まれて目を閉じた。松田、元浜。守れなくてごめん……何もできなくてごめん…そう心の中で呟いて、くるべき衝撃に備えた。

どんなに待っても衝撃がこない、不思議に思った俺は思わず目を開けた。するとそこには…
「ハロー、調子いい?」
アメリカ国旗を顔につけた、厳ついピエロがたっていた。

ーーーー一誠ｓｉｄｅ　ｅｎｄーーーー

ーーーー雄輔ｓｉｄｅーーーー

助けてと声が聞こえたので、助けに来ました。なんか蝙蝠の羽みたいなのはやした人がいますが、危険人物ですね倒しましょう。三人に向かっている槍と三人の間に飛び降りて、槍をはじく。この程度ならもはや変身も強化もするまで出なくなっている俺…順調に鍛えられているのか？正直実感がまるでわかないのだ。いつもぼこぼこにされてるから。おっと、今この場ではどうでもいいことだった、目の前のことに集中しよう。

「ハロー、調子いい？」

取りあえずそこの木に座り込んでいる男の子を安心させるために軽いジョークを言ってみたけど。どうやら場の雰囲気にミストマッチしてしまったらしい。

「少年、大丈夫かい？」

「は、はいっっっっ!!…くぅ、大丈夫、です」

強がりで言ってるのが目に見える。だから俺は無理する彼に肩を貸して、取りあえず木によりかからせた。

「おい！てめぇなんだゴラァ!!」

あっちで羽はやした何かが吠えてるけど無視。念のために注意はしつつ。男の子の方に話しかける。

「君、名前は？」

「な、名前ですか？一誠…兵藤一誠です」

「ＯＫ兵藤一誠君、今の君なら歩けるね？」

「え？……あれ!?なんでだ、痛みが全然ない！」

自分の体から痛みがなくなっていることに驚く一誠君だが、あくまで俺の波紋の方で痛みを和らげているだけだ。傷が完治したわけではないのだが、そのことは今は伏せておく。重要なことじゃないからね。

「この二人を連れて逃げるんだ、ここから開けた道をまっすぐに進むんだよ？木の間が開いていて、明らかに道って感じのところを進むんだ」

事前にここら辺の木に話をして道案内ができるように頼んでいたのだ！自然と話せるって便利よね！何より楽しい！

「あのでも貴方は……てか、俺と大体同い年に見えるけど、大丈夫なのか？」
「平気平気、こう見えて結構行ってるからさ（精神年齢的に）」
「……いい加減に無視してんじゃねぞぉぉぉ!!」
　チャラそうな方の堕天使がこちらに魔力の球を投げつけてきた。咄嗟に三人の盾になるように前に出て。庇う。当然弾は俺に直撃して、派手に砂埃が舞った。あとでかい爆発音だ。
「ピエロの人!!」

「ざまぁみやがれ！下等生物がぁ！」
　一誠君の焦る声と、チャラ堕天使の喜びの声が聞こえるが。てかピエロの人ってどうよ、嫌なのってない俺が悪いんだけどね？ピエロの人って……まぁ、それはこの際置いておこう、だがチャラ男、てめぇは駄目だ。そして俺は無事だ。ピンピンしている。
「……何かしたか？まさか今のが攻撃だとか言うんじゃないよなぁ？」
　砂塵が俺の体から離れて飛んでいき、木々の間から指す月明かりが今の俺の姿を照らし出す。環境超人エコガインダーへと変身した姿を。
「……ピエロの人、貴方は一体…」
「お前、その姿は。まさか、そんなわけがない！ありえない！」

一誠君が思わず敬語になるレベルで驚いているので、名乗りを上げないわけにはいかないだろう。

「俺の名はエコガインダー。闇を照らして、悪を討つ!!」

手を腰に持っていき、胸を張る。かの光の巨人のポーズに倣って。ここから、反撃開始だ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第13話　戦闘と危機と自業自得？

「俺の名はエコガインダー、闇を照らして、悪を討つ！」
「エコ…ガインダー……」
一誠君がなんか言ってるけど今は気にしてられないな。それより早くここから逃げてほしい。そんなことを思いつつ目の前の堕天使二人組からは目を離さない。というか何故エコガインダーってい言うと毎回驚かれるんだ？そんなに変な名前かな？かっこいいと思うんだけど…
「お前が、エコガインダーなわけがない！でたらめ言うんじゃねぇ!!人間!!」
そう言ってチャラ男堕天使は光の槍を投げてくるが、俺にそんな攻撃は効かない。当たる直前に手でつかもうとすると、そのまま砕け散ってしまった。
「随分ともろいな、もう少し本気を出してくれ」
「なっ、俺の全力の攻撃を…」
「す、スゲェ！」
チャラ男堕天使の顔が驚いた顔をしてるが、これで本気はさすがにないだろう。恐らくはまだ何か隠してるとみるべきか。というか一誠君は早く逃げなさい。なんでまだ

いるの

「貴様では荷が重すぎる…俺に任せておけ」

そう言うと今度は隣のマッチョ堕天使が前に出てきた、マッチョというか体格がいい感じだ。

「死ねぇ!!」

そう言って俺に向かって力の籠ったいい右ストレートを顔面に叩きこんでくる。しかし、この一撃も俺を退けさせるほどじゃない。

「いいパンチだ。だが力に頼り過ぎてる、パンチってのはこう打つんだ!」

少し右足を引き、左足を軸に全身の関節をフルに使って体重もの説感じで相手の顔面に右ストレートを叩き込む。顔面にあたるとその勢いのまま大きく後ろに吹き飛ばされ、木にぶつかると白目をむいていた。恐らく頭の打ちどころが悪くて気絶したのだろう。

「ひ、ひぃぃっ!!た、助けてくれぇ!!」

そう言ってチャラ男堕天使は翼を広げて夜空に逃げて行ってしまった…え?このガタイがいい人どうすんの?家で看病?えぇ……俺が困惑していると、不意に後ろから声をかけられた。

「あ、あの!助けてくれてありがとうございました!!」

「あぁ、いや、無事でよかったよ」

結局帰らなかったんですね。危ないから逃げろって言ったのに…しかし一誠君はすごく目を輝かせているんですが……あれかな？このスーパーボディのカッコよさに当てられちゃったかな？わかる！エコガインダーかっこいいもんね！中身は俺だけど、かっこいいもんね！（ここ重要）

「よし、念のため森の外まで送るよ。万が一道に迷ったら大変だからね」

「本当ですか!?ありがとうございます！」

凄いかしこまってお礼されてしまった…一応同級生なんだけど？あ、そういえば誤魔化したんだった……どうする訂正するべきか…まぁ、いいか（思考放棄）細かいことは気にしない。きっとそのうちまた関わるし、その時に何とかしよう。流石に同い年に敬語はちょっと嫌だぞ？…そういえば俺関われるのか？中学にも通わずに修行してるし。大丈夫か？……やべぇ、不安になってきたどうしよう。ま、まぁきっと平気平気（震え声）

「？どうかしたんですか？」

「あ、いや、大丈夫だ。行こうか」

ぬぐえない不安を胸に、おれは一誠君を森の外まで案内した。一応ガタイのいい堕天使も担いできて人に見られないところに横たわらせておいた。すぐに外だってわかる

だろうし、森の中で迷われて家になんてこられたくないからね。
「それじゃあ、一誠くん。また会う日まで!」
取りあえずそれっぽいこと言ってお別れだ!颯爽とその場から飛び去ろうとしたんだが。
「あの!」
「うん?何だい?」
「写真撮ってください!」
まさかの写真…やっぱ一誠君も男の子だねぇ!いいよいいよ!俺もよく写真撮るためにウルトラマンランドとかにも行ったしなぁ。格好いいもんね!
「もちろん!ただ、見せびらかすのは駄目だぞ?二人だけの秘密の写真だ」
「もちろんです!」
本当なら友達とかに見せたりしたいんだろうけど、なんだか今まで戦ってきた人外の方々みんな俺の名前を聞くたびに驚いてるんだもんなぁ。もしかしてなんか俺した?それで指名手配されてるとか?やっぱそしたら集団リンチの刑にあっちゃう。俺まだ死にとうない!
とういうわけで、やはり一誠君には悪いけど、見せびらかさないでもらう。そして快く承諾してくれる一誠君ありがとう。どうやら何かを撮るためにカメラを持ってきて

いたらしく。それでお互いに握手してる写真と、エコガインダーの決めポーズを二人でしている写真を撮った。なんか俺がヒーローになった気分！まだまだ本物のエコガインダーには遠く及ばないけど、それでも助けられる人たちは助ける！頑張ろう自分！

「それじゃ今度こそ、また会おう！シュワッチ！」

掛け声とともに空を飛び、家に帰る。これ本当一回はやりたかったんだよね。夢が叶ったぜ！

その後は普通に家に帰った、到着して変身を解く。後は一回でいいから素知らぬ顔でおおーい！とか言って今来たみたいな事してみたいよね。ウルトラマンみたいな感じで

扉を開けてリビングまで行くとどうやらみんな寝ているらしい。しかしリフィルやマキちゃんはリビングで寝たままだ…幽香さんどうやら二人をほっといて先に寝たらしい。

「このままだと風邪ひくよね……仕方ない」

色々考えたが俺の部屋のベットに寝かせることにした、以前幽香さんが寝てるときに用事で部屋に入ろうとしたが、寝ながら物をぶん投げられたことがあり、もう二度としないと固く誓ったのだ。あんな剛速球二度とごめんだ。もし当たってたら悲惨なことになってただろう。俺の顔面が。

さて、どうするかは決まったが問題が一つ、二人とも衣服がはだけまくっている。そう、とてもよろしくない格好なのだ。魅惑的な太ももやら、胸やらがチラ見えしていて非常に危ない。こんなこと思っていること自体最低だと思うが本当二人とも美人過ぎるのだ……俺だって男の子だもん!!三大欲求の一つくらいあるもん!!

兎に角、なるべく静かに、スピーディーに事を済ませよう。まずはマキちゃんを抱える、流石に二人同時には難しい…何より二人同時だと米俵担ぐみたいにしないといけないし、それはスゴイ＝シツレイ。にあたるだろう。

マキちゃんを起こさないように抱えて、俺の部屋まで運ぶ。都合上お姫様抱っこになってしまったが仕方ない。決してチラ見えする胸や太ももには目を向けない。大事なところは見えてないが、それでも男子にはいささか刺激が強すぎる。

「んぅ…マスタァ…そこはだめだよぉ。えへへ…」

どんな夢を見ているんだ!?ここにきて寝言でも誘惑してくるとは…しかし!俺は耐える!決して襲ったりなんぞしないぞ!強く硬く決意し、俺は歩みを速めた、決してマキちゃんの寝言を聞き続けるとまずいからとかではなく。体が冷えるといけないからだ。

何とか無事にマキちゃんとリフィルを寝室に運び終えた。リフィルはマキちゃんみたいに胸が零れ落ちそうになることもなかったし、太ももが少し魅力的だったが、マキ

ちゃんに耐えた俺に死角はなかった！

「さて、お休み二人とも、いい夢を」

そう言って俺は部屋を後にした、これからどうするか？余ってる部屋に入って寝ます。リビングの片づけ？食器の類は洗ってあったので、飾りやらなんやかんやは明日です。そして空き部屋の一つに入って寝る。幸い週一で掃除するようにしてたので、綺麗な部屋だ。ベットにダイブ！それじゃお休み～～

ーーーー「どうやら雄輔も寝たみたいね。それじゃあ、私たちはこれから楽しみましょう?」

家から少し離れた場所で先ほどの行動を監視していた幽香は、皆が寝静まったころを見計らって行動を始めた。幽香の視線の先には、先ほど戦いから逃げ出したチャラ男堕天使が、植物のつたで縛りつけられていた。

「んーーーーー!!んんーーー!!」

「あらごめんなさい、あまりにも聞くに堪えない声だから、口は塞がせてもらうわ」

男は己の運命を嘆くことしかできなかった。逃げ出した先でこの家を見つけ、腹いせに襲ってやろうと考えたのが運の尽き。幽香に見つかり、ボロボロにされ拘束された挙句にここでまた何かされてしまうのだ。

「貴方がどうやってここをかぎつけたのかは知らない。でも仲間に連絡されると厄介なのよねぇ…貴方がここを見つけた方法と、ここで見たこと起きたことを誰にも話さないなら、解放してあげる」

そう言って口に巻かれていた蔦はその拘束を解いた。瞬間男は何もかも喋った。こ

こを見つけたのは自分の能力で、男と一緒に来たやつ以外には誰も知らないこと。自分がどうやって能力を使って見つけたのかまでも事細かに。
「そう、ありがとう。感謝するわ」
「なら！この拘束を解いてくれ!!解放してくれるんだろ！」
「ええそうね、ほら、解放してあげる」
そう言うと蔦は拘束を解いた。自由になった途端男は空高く舞い上がり、一目散に逃げだした。
（馬鹿が!!所詮あんなの口約束、解放さえされれば、俺の自由さ！すぐに他の連中にこのことを……うがっ！）
そんなことを思っていると、居に猛烈な痛みが走る。まるで意の中を無造作に弄られているような感覚が襲ってきた。
「あぎぃ!!ぐがぁ!!な、なんだよこれぇ!!」
「あらら、貴方約束を破ろうとしたのね」
ふと、声が聞こえそちらを向くと、幽香が傘を差しながら優雅に佇んでいた。クスクスと今の堕天使の状態を見て笑っている。
「ダマしたなぁぁっぁ!!このクソアマぁぁ!!」
怒りに我を忘れ、攻撃しようとしたが、その瞬間更に痛みは増した。胃だけでなく、体

全体に痛みが回り出した。
「なんだよぉぉぉぉ!何が起こってるんだよぉ!!俺に何をしたぁ!」
「貴方には種を植え付けておいたの」
　種?思わず男は顔をしかめる、そんなもの埋め込まれたとして何になるのだ?と、その男の様子を見て、幽香は笑いながら説明を続ける。
「アハハ!ただの種なわけないでしょ?その種は、宿主の体内に侵入すると、その体を自分の都合のいい体に変えるの。栄養をつかいながら、内側の寄生したところからゆっくりとね?」
　その説明を聞き、顔から血の気が引いていくのを男は感じていた。己の体が植物になる。今この瞬間も植物へと変わっていくのだ。
「た、頼む!やめでぐべぇぇ」
　男は恐怖のあまり泣きながら頼み込んだ、しかし、彼女はそう言われてやめるほど、敵に対して優しくはない。
「貴方が約束を破ろうとしなければ、時期に種は消えるはずだったのよ。私の力で、破ろうとした時にだけ発芽するようにした。そして貴方は破ろうとした。だから、種が発芽した。つまり全部貴方が悪いの」
「ごべんなざい!!ゆるじでください!!!」

泣きながら男は謝る、空中で土下座をするという、一種のかくし芸のようなことを披露しつつも。本人はいたって真面目なのだろうが、幽香はその姿に笑いをこらえられなかった。

「アハハハハハハハ!!本当に無様ね!みっともなく命乞い?私がそれでやめると思うの?馬鹿ね。一度チャンスをあげたのに、それを無駄にしたのは貴方自身よ、精々苦しみなさい」

そう吐き捨てるように言うと、幽香は家へと帰って行った。男は追いかけようとするが、痛みで最早飛んだままでいることも叶わず、ふらふらと地面に落ちていった。

「いやだぁ…しにたくないぃ!助けてくれぇ!!」

叫び声にも近い声で助けをこう。しかしその声にこたえるものはいなかった。

風見幽香を敵に回したのが運の尽き。彼はこのままゆっくりと植物に変わる。もうすでに彼の腹部から、徐々に変わっていっていた。

「やだぁ、やめろぉ!いやだぁぁっぁ!!!」

再び叫び声をあげるが、やはり誰にも届くことはなく、風と森のざわめきに、男の悲鳴はかき消された。腹部から体が植物に変わる恐怖と激しい痛みに何度も叫び声をあげたが、まるで森がそれを隠すかのように、男の悲鳴をかき消していた。

ー数か月後、この森でうめき声をあげる人型の植物があるという噂が立つのだが、これはまた別の話だー

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第１４話　未来の不安

今日は修行開始から一念記念日。その記念に『巡る幸い亭』で記念パーティーだ。

え？日数が進むのが早い？慣れると月日が流れるのがとても速く感じるんだ。

実際俺にはこれといった珍しいことは起きなかったしね。まぁ、リフィルの店によく行くせいかすっかり常連さんになってしまったが。俺とマキちゃんと幽香さんの三人がね。これが俺に起こった珍しいことかな？前は常連さんって言われるようなことはなかったし……家からあんま出なかったもんね！ガッデム!!

そんなことを思い少しブルーな気分になったが、気分を入れ替えるため周りを見てみるマキちゃんは何故かリフィルと火花を散らしたりしてるし、幽香さんは店のマスターであるアフリト翁と紅茶やコーヒーについて語っている。俺はと言えば、そんなみんなの様子を見ながら紅茶やコーヒーなんかを飲むのがもはや日常だ。

「今日の紅茶はなんだかいつもと違いますね、アフリト翁」

自分は他の人たちがアフリト翁の事をマスターと呼ぶ中、アフリト翁と呼んでいる。実際にそう呼ぶ人も何人か入るし。何となくだが、アフリト翁の方がしっくりするのだ。

「ふっふっふっ、それはそうだろうねぇ。でも、問題は味だろう？どうだい？美味しいかい？」
「美味しいですよ？いつもより甘めで、個人的にはこっちが好みですね」
　いつもアフリト翁が淹れる紅茶は、もう少し苦みや酸味？みたいなのがある。でも今日にはなんだか甘さの方が強めで、こっちの方が子供舌な自分には合っているのだ。
「はっはっはっ、良かった良かった。お前さん、年の割にかなり大人びているからねぇ。淹れる紅茶なんかにも迷うよ。お前さんを見ているとたまに、本当はもっと年が行ってるんじゃないか？と思うこともあってねぇ。ゼラードも少しはお前さんを見習ってほしいよ」
「ゼラードさんは元が少し大雑把なところがありますからね～」
「そういうところをきちんと見ているのを見ると。ますますそこらの中学生には見えないねぇ。まぁ、無理に聞きはしないよ」
「……ありがとうございます。アフリト翁」
　お辞儀してから、紅茶を飲み干す。正直アフリト翁は普通じゃない。キセルを吸いながら軽快に笑い、また幽香さんとの会話に戻ったが、彼の周りにはなぜか紫の煙が漂ってるし、なぜか足組みながら浮いてるし、そして普通の客にもなぜか「マスターだからね」の一言で済まされるし。絶対に普通じゃない。

でも、それは俺も同じで、そんな俺に何も聞かず受け入れてくれるアフリト翁にとても感謝している。
「ところで、その紅茶なんだがね」
「はい、この紅茶が何か？」
「いやぁ、実はその紅茶を淹れたのはね」
そう言いながらこちらに近づいてきて、こっそり耳打ちで次の言葉を囁こうとしたマスターに
「リフィゴホォ!!」
「余計なことを言うな!!アフリト翁！」
リフィルは問答無用で飛び蹴りをくらわせた。マスターは床を転がり、派手な音を立てて壁にぶつかる。
「やれやれ、青い春真っただ中のものは、気性が激しいねぇ」
「うるさい！そして違う!!」
顔を赤くしながらアフリト翁に吠えるリフィルを見ながら、追加の紅茶を飲んだ。さすがにさっきのは蹴られた音が大きくて何言ってるのか分からなかったが。気にしても仕方ないだろう。
「おっと、お祝い用に用意しておいた肉が切れてしまったねぇ。すまないが雄輔君、買い

に行ってもらえないかい？」
「いいですよ、では少し席を外しますね。マキちゃんと幽香さんは楽しんでてー」
そう言いながら残りの紅茶を飲み干して、アフリト翁からお金と買うもののメモを受け取り店を出る。本来なら客の自分に頼まれるのは可笑しいのかもしれないが、前からちょくちょくこういう頼まれごとをしていたので、自分的には違和感はない。それにしっかり報酬もあるから、問題なしなのだ。
「じゃあ、お肉を買ってきますかー！」
声を出して少し活を入れ、足早に肉屋へと向かった。

ーーーー買い出し完了！之より帰投します！しかし、その前に余ったお金で自分へのご褒美タイムだ。道すがらにある自販機で飲み物でも買って行こう。因みに、ここの飲み物はかなり個性的なものが売っている。
ゴラコーラや、ヘブシなどの昔ながらの物もあるが、ここ数年で『ユグドラシル』という企業が突然売り上げのトップになった。売ってるものは、オレンジスカッシュ、バ

ナナオーレなど普通の物からドングリスパーキングやマツボックリスカッシュなど、どんな発想してたら売れるんだ？というものも多い。
　因みに自分が今買ったのは新発売のピーチエナジーソーダだ。
「オレンジあたりと混ぜたら美味しそうだよなぁ」
　そんなどうでもいいことを考えつつ帰ろうと自販機から歩いていたら、前から何とマキちゃんがやってきた。
「おー？マキちゃんどうしたの？」
「え、いや、あ、あの、マス、ター？」
「そだよー、マスターだよー？どしたん？」
「～～～～っっっ!!!!」
　なんだかおどおどしていたマキちゃんに、取りあえずおふざけ口調で話しかけてみたけれど、急に涙目になって抱き着いてきました。うん、混乱しすぎて冷静になった。声を殺して泣くマキちゃんを取りあえず頭を撫でて落ち着かせる。
「どうしたの？マキちゃん？」
「ううん、マスターは、この時代のマスターはまだああなってないんだね」
「？どうゆうこと？マキちゃん」
　詳しい事情を聴こうとしたが、不意にマキちゃんが離れていく。ある程度離れたら涙

をぬぐい、覚悟を決めたような表情でこちらを見る。
「ごめんね、マスター…でも、私はマスターをあんな怪物にはさせたくない！」
神器を開放し、こちらに構えをとるマキちゃん。俺の脳はいまだに事態に追いつけていないが、今はとにかく自分の身を守るしかない。こちらも構えを取り、いつでも迎撃できるようにする。
「これが終わったら話を聞かせてもらうよ、マキちゃん！」

ーーーーーお互い地を蹴り、一瞬で間合いを縮める。雷を纏った拳の雨が降りかかる。それを受け流し、時に受け止めて凌ごうとしたが、やはり素の状態では些か不利だ。（エコロジーパワーを使って少しこっちの有利って感じだな…まだ変身はしなくてもいい！）
実際にはこの場で変身して、万が一誰かに見られてしまった時のことを考えて、変身はしないようにしていた。緑のオーラが身を包み、雄輔の身体能力を底上げする。
「どうしたマキちゃん！その程度では倒せないって知ってるだろう!!」

今度は雄輔が攻める、一発の拳に、力を集中させて、狙い撃つ。マキの体は反応が遅れてしまった。腹部に砲弾のような一撃が放たれた。マキは大きく吹き飛ばされ、地面を転がった。

「ま、まだ、まだ負けてないよ、マスター…」

強がり、立ち上がるマキ。しかし、マキの体を見れば一目瞭然であった。先ほどの一撃、マキは反応することが出来ずにもろに食らってしまい。立っているのもやっとであった。

「マキちゃん…君は一体…」

「マスターを……あんな姿にしたくないから…ここで、終わらせなきゃ」

そう言うと同時に、体が傾き。倒れこむ。その様子を見て咄嗟に駆け寄る雄輔。そして治療を施しながら考える。雄輔からしたら大変不可解な言葉だ、あんな姿、化け物、一体自分に何が起きて、そして目の前のマキが何を語っているのかの見当がつかない。

「俺に一体何があったんだマキちゃん。教えてほしい」

「マスター…マスターは、そう遠くない未来で…怪物になったの。すべてを破壊しようとする怪物に」

「怪物？」

治療を開始されると、マキは大人しくなり、語り始めた。未来、怪物、あまりにも突

然の事に雄輔は未だ、理解が出来ていなかったが。兎に角自分が何かやらかしてしまったことだけは察することが出来た。
「マキちゃん。そのことについて詳しく…んんっ??」
　その時、マキの体が徐々に光、消えていく。
「あ、時間切れかぁ。結局私何もできなかったなぁ…」
　その様子を見て、項垂れるマキ。足元から光の粒に変わっていく。
「そんなことはないよ。詳しくは分からなかったけど。何か起きることだけは分かった。化け物になんかならないって誓うよ」
　項垂れたマキに、力強くそう語る雄輔、雄輔のその姿を見ると、何故だかマキは大丈夫な気がしてきた。きっとマスターなら…そう思わせたのだ。
「マスター、京都では気を付けて。そこがマスターの、そして未来の分水嶺だよ。」
「京都…分かった。後は任せて!」
　手を握り、再び力強く頷く。もう既に下半身は光に変わっていた。ここにいる時間ももうあとわずかだ。
「ありがとうマスター、私。信じてるから。きっとマスターなら」
　そこまで言って。遂に体全身が光に変わり。空へと昇って行った。
「……任せてマキちゃん。絶対に変えてみせる」

そう決意する。はっきり言うとまだ少し謎が残っていた。戦った時、なぜか今のマキっちゃんよりも弱かった。未来（仮）のマキちゃん。幽香さんの修行を受けていれば、まだまだ強い気がするが、なぜか力はとても弱かった。

「続きは今度会えた時だな」

そうして、このことについての追及はやめ、まずは肉をいち早く届けることに考えを切り替えた。正直そこまで時間はかからなかったとはいえ。遅れているのが事実。何を言われ、やらされるかもわかったものではない。荷物を抱え、走って帰った。

京都、怪物になったらしい自分、この先に不安を感じつつも。雄輔はそれを振り払い。今日を楽しもうと決めた。

お店につけば案の定遅れたことを理由に、色々と弄られたのだが、先ほどのことについては一切語らなかった。今日は宴会。重い話題はまた今度と思っての配慮だ……もっとも次にこの話を幽香などに語るのは、言うタイミングを逃し続け、大分

先になってしまうのだが。

To be continued……

第十五話　始まる物語

さて、あれからもう原作が始まる時期になった…はず。多分。正直この長い年月で、ないに等しい原作知識はもう消えかけてた…原作キャラの名前くらいしかもうわからん。

結局俺は修行の途中で成長が止まってしまった。幽香さん曰く、壁を越えないとだめ。だそうだ。

確かに急に成長が止まって焦ったのだが、焦っても仕方ないということで、これを機に息抜きがてら旅行なんかをしてみた。勿論幽香さんとマキちゃんを連れて。たまにリフィルもいれて。

海外旅行では、リフィルの意外な外国語力に驚き。

国内旅行では、幽香さんの豊富な知識にびっくりだった。

以前、未来（仮）のマキちゃんに言われた京都にも行ったのだが、多少面倒ごとに巻き込まれただけで、特に自分が怪物になることも言われることもなかった。

マキちゃんも神器の扱いが結構上手くなり、必殺技みたいのも結構あるのだ。今は駒王町に戻っており、何か事件でも起きないかなと待っている日々だ、事件を待ち望むと

かかなり最低な気もするけれど。すまない駒王町。
「雄輔〜！手紙が届いてるわよ〜？」
「今行きまーす！」
幽香さんに呼ばれたので、自分の部屋から下のリビングまで駆け足で降りていった。
この家に手紙を寄こすのは、旅先で出会った数少ない友人たちしかいない。
「誰からですか？」
「あの吸血鬼姉妹のとこよ、ほら、写真付きで」
そう言って写真を見せてきた幽香さん、そこには大きな門の前で、月がきれいに映る夜中に、中華服を着た女性、メイド服の華奢な女性、パジャマ？みたいなのを着た紫髪の女性、それに中央には姉妹であろう幼い双子ーーーーー片方は紫髪できっちりしており、もう片方は金髪で快活な印象を受ける少女ーーーーーが写っていた。
「元気そうですね、姉妹の仲もよさそうだ」
「まぁ。どうやらあの子たちの周りには厄介ごとの種が転がってそうよ？」
「どうゆうことですか？」
そういうと今度は手紙の方を俺に渡してきたので、そちらの方に目を移した。

ーーーー前略、雄輔様。貴方に出会った時のことをつい先日のように思い出します。刺激的な出会いから始まりましたが、あの時の事をこの場を借りて再度謝罪いたします。もしまたこちらに来るときは是非我が家によってください。その時は我々紅魔館の者総出で、お出迎えしたいと思っています。妹のフランも、いつ遊びに来るのかとうるさくてたまりませんので。こちらでは最近真祖を超えたとか抜かす三流吸血鬼たちが少々煩わしくなってまいりました、そちらはお変わりないでしょうか？貴方様ほどでしたら、たいていの事はどうとでもなるでしょうが、それでもやはり心配です。次に会う時は是非、言っていた日本のお茶とお菓子を楽しみにしています。それでは

レミリア・スカーレットより

PS．お兄さまが来るの楽しみにしてるよ！　フランーーーー

「あっちは何か事件のにおいがするね……大丈夫だといいけど」

「あの姉妹はそう簡単にくたばらないわよ、御付きのメイドと門番もいるし、いざとなったらあのもやし女もね」

「もやし女はないでしょう……今度また遊びに行かないとね」

「そうね、それと雄輔、ついでに買い出しよろしく」
そう言うと手に持っていた手紙と写真をスッと奪われ、代わりにメモと財布を手渡された。
「……マキちゃんは？」
「あの子なら今花壇の手入れ中」
「……幽香さんは？」
「私はこれから自分の花畑に水やりよ」
「……行ってきます」
どうやら俺はいつの間にか完璧に退路をつぶされたらしい。ここで断っても後々酷い結末が待っていそうだし。ここは素直に従って、買い出しに行くことに決めた。
買ってくるものはすぐにそろうだろうし、ちゃちゃっと行って帰ってくることにしよう。
俺は靴を履いたら即座に家を飛び出して目的の場所へと向かった。

「これで全部揃ったかな、後は帰ってご飯の支度を……？」

メモに書かれたものを商店街で買い終わったので、帰路につこうとしたらなにやら広場の方向から変な気配を感じ取ったので思わずそちらの方を向いた。何か嫌～な気配を感じる…これは少し調査が必要そうだ。

そう思ったら居ても立っても居られなくなったので、早速嫌な気配の方に静かに急いで向かった。

嫌な気配はどうやら一組のカップルしか見えないこの公園からしい、しかしこの時間帯にカップル一組しか見かけないのはちょーっと腑に落ちないな。

そう思っていたら何やらカップルの話声が聞こえ始めたので、息を殺してその会話を聞くことにした。

「イッセー君、今日は楽しかったわ」

「俺もだよ。すごく楽しかった」

「……ねぇ、イッセー君。私のお願い……聞いてくれないかな？」

「何？夕麻ちゃん？」
　その直後、彼女さんの方が背中から翼を生やした…何事!?
「死んでくれないかな…？」
「え？」
　光の槍が彼氏を貫く……その前に！
「はい！ストーーップ!!」
　横から槍に飛び蹴りをかましてそのまま蹴り砕いた。あぶねー！もうすぐで彼氏君死ぬとこだったわ！
「な!?」
「え!?」
　両方とも驚愕といった感じだが、夕方に突然殺しあうカップルの方が驚きだよ。
「さて、お二人さん。なんだか知らないけど殺し合いはいけないよ。お互いキチンと話し合わないと」
「くッ！邪魔するな人間！」
　二人を落ち着けようと間に割って話したけど、彼女さんの方は聞く耳一切持たず再び光の槍を投げてくるが。
「おっと、だからこういうの投げたら危ないって」

指二本でキャッチしてやりましたよ！これぞエコガインダー奥義、二指真空把！（丸パクリ）しかし彼女さんはこれを見てさらに激昂してしまったようだ。
「な！この、人間なんかに！私は負けないわ！」
今度は槍を手に持って襲い掛かろうとしてきたので、こちらも受け止めた槍をもって応戦の構えを取る…が、その前に！
「後ろでこっそり人殺そうとしてんじゃないよ！」
未だに状況が呑み込めず呆然としてる彼氏君の後ろに忍び寄っていたやつに槍を投げる、咄嗟だったので狙いが甘々で簡単によけられてしまったが、彼氏君は無事だ。
「ちっ、人間にしては中々やるな」
「そらどうも、で、あんた誰」
彼女さんの隣に先程の男が並び、こちらを見て構える。正直このぐらいなら何人束になっても平気だが、彼氏君守りながらだと少し後手に回ってしまうかもな。
「あ、あの、貴方は」
「それは後、今はこの状況を切り抜けるのが先だ」
彼氏君の方をようやくきちんと見据えて会話ができた…てか、もしかして一誠君か？あんま変わってないな～。
「お、おう！でも一体どうやって…それに何が何やら……」

どうやらまだ脳がこの状況を理解できてないらしい、まぁ仕方ないと思うが。兎に角今は一誠くんを守らないといけない。そう思って構えなおした直後に何やら魔法陣？というのかよく分からない円が地面に現れて、そこから紅い髪の女性が現れた。

「貴方達……私の街で何してるのかしら？」

「紅い髪……貴様！グレモリーの娘か!?」

グレモリー……確かそんな名前の人がいた気がするが……出てこないな。しかし今は一誠君のことを彼女に任せて、俺は奴らの相手をしよう。

「グレモリーさん、彼を連れて逃げてください。ここは俺がなんとかしま「こうなっては仕方ない！引くぞ！」

俺が言い切る前に、相手の方が先に帰ってしまった。奴らが去った後の広場では、俺達３人の間に微妙な空気が流れていた……

「……とりあえずなんとかなったわね、それで、そこの貴方は一体」

「それでは、サヨナラ！」

絶対何かしらの追求をされると思ったので、その場で回れ右して買った物が崩れたりしないように抱えて、全速力で走った。

「ちょっ！貴方待ちなさ…足早いわね！」

後ろで何か聞こえるけど無視、多分一誠君に色々話をしたりするだろうし、俺に時間

をかけてられないだろうから。多分大丈夫だ。逃げ切れるはず！

「俺はただの一般人ですのでーーーー！さようならーーーーー！」

「ちょっ、待っ、待ちなさい……早すぎるのよ貴方ーー！」

俺は呼吸もエコロジーパワーも使って全力でその場から走り去り、念の為少し遠回りして家へと帰った。

「優香さん、はぁ…はぁ…今帰りました……」

「お帰りなさい。随分と疲れてるわね？何かあったの？」

「それがですねーーー」

俺はあの公園であったことを話した、もしかしたら優香さんの方が俺よりこの手の事情に詳しいかもしれないと思ったし。

「グレモリーね……生憎私は知らないわ。それより食材は？」

「え、あぁ、キチンと買ってきましたよ？」

「そう、ならちゃちゃっと作っちゃうから渡しなさい」

そういって俺から食材を受け取ると何も言わずにキッチンへと向かった……どうやら幽香さんには興味のない話題だったらしい。とりあえずマキちゃんを呼ぼう。そう思って未だ庭仕事中のマキちゃんをのところへ向かった。

「……あの赤毛、この街に絡んでいたのね。奇妙な縁もあったものだわ」

幽香さんの呟きは俺には届かず、風に流されてしまった

To be continued……